

楊柳歌

泉鏡花

一

松原小橋の停留場で、當日の同行二人が電車を下りたのは黄昏であつた。

「此處々々、」
と清之助は、外套の下に腕組みをして、あの、通りの西側を颯と流るゝ、京の水の、淺黄を煽つ岸を覗き、

「着いた晩です．．．．それ、心得た顔をして、翻然と威勢よく飛下りると．．．．もう一足で既の事に踏込まうとしたんだよ。暗さは暗し、勝手は知らず、いや、おのぼり、のつげに吃驚さ．．．．確か此處だつて。」

今頃を一時、上る下る人通り、繫きが中に立停まる。これは自分名告らずとも、其の風采でも能く分る．．．．名所圖繪以來、祇園の前の二軒茶屋では、赤前垂の姉さんが、すらりと揃つて、とんとゝゝゝ、とんとんと豆腐を切る．．．．と今でも和蘭陀の唐人が、長い煙管を肩下りに、あツけらかんと其の顔に見惚れて居ると心得た、おのぼり氏。

其の附合ひに、．．．．土地では何んの珍らしからう。木の葉一枚流れぬ水に、同じく袖を映したのは、襟直して、二三年、舞妓上りの、今若手で、花の都に紫の佛も見よ、お桐と云ふ、祇園の藝子、薬湯の町の名取である。

が、派手ならず。恚う、俯向き勝ちの、襟を深く、細りした姿に引緊めて着たから、其の二枚小袖の、下着の襖も捌かぬが、上

着と同じ大島を襲ねたらしい。白羽二重の裏細く、たよ／＼とした八ツ口の、腰帯に掛るのが、白垢のやうで清らかに、雪の膚には冷たさう。桔梗の花の八重らしいが、白桃に一寸見える・・・・三ツ紋の羽織の黒縮緬が。――生際の濃かな鬢の毛のやゝ曇つた中に、星の簪の珠とゝもに、――此の女の色香に榮えて、濃い紫に視めらるゝ。

身動きに、董の薰りで、

「あんななあ、暗夜でも覚えてお居やすか。」

と清しい眉して優しく言ふ。

「驚いたから覚えて居ますとも。だが、何んだねえ、夜見たよりは町の幅が廣いやうだね。」

「あんな、」

と袖を合せたまゝ、顔ばかり振向けて、「電車が往きやはる、来やはるよつて、家が引込みやはつたんえ。」

と露の然も垂れさうな、黒目勝な瞳で教へる。

清之助は眞面目な顔して、

「はてな・・・・はゝは。」

と笑出した。

「然うかい、いや、家が引込みなすつたら、人間は、さあ、お出掛けなさらう。」

お桐は襟もきちんと澄まして、

「何を笑やはる、私可厭え。」

と情らしく斜に見て、

「頬に何ぞ着いてやへんの。」

「何んの、頻邊にもしか附いて居れば、笑靨のほかはありません

まいがね、口が些と可笑いぜ。」

「え、」
と袖口を口に當てた、紋が揺いで、含まれた呼吸が、其の眞白な花片に觸つた。

「嘘だよ。お前さんと私が二人で居るんだ。紅がはづれはしな
いがね。……だつて變だもの。家が引込みやはるからさ。」

漸と分つて、莞爾した、切の長い目を伏せて、

「憎體やな。そない毒なこと言やはるなら、私最う清水様へ連れてつては上げへんえ。」

と肩を細う、衝と伸上るやうに横を向く。

「あゝ、あやまつた。今日の處は杖柱ともお頼み申す、何分とも。」

「それな、貴下やかて、そない言やはる。私のとこ杖やつて、
をかし、一寸、もしな、お爺はんであやすかえ。」

柄のない處へ、柄を上げて、切返したのも、うら若い。――今日は晝頃から一緒に歩いた、途すがら、心盡しの案内振で、電車が唯通るのさへ、あれ行きやはると、言教へる、――蒼い焔で飛ぶ車、此の人の語に乗ると、眞綿の上をすら／＼と迂るやうに見えて、清之助は、をかしい處か、其の實、柔かに懐かしく身に染むのであつた。

「いや何うして、不思議なほど優しく聞える。……」

「難有うおすえ、おかみはんに宜しう、」

とお桐は莞爾して、また俯向いた。

「然う慇懃に挨拶をされて、家内にお言託まで承ると、勢、停車場へ驅出して行かねばならない。さあ、眞面目に、御案内、……なんのつて、話しながら線路を抜けられる處が嬉しい。えゝと、此處を眞直に参りますかね。」

「然うどす、此の邊も一寸賑かだすやろ。」

と人通の中を、横に切れると、酒屋の藏らしい白壁造りの横町を、つい加茂川の岸へ出た。すぐに橋があつて、お渡りやすと、色もほんのりと白んだ中に、夕日の餘波を薄く留めて、撓やかに夕越人を迎へ顔。水の面も同じ姿で、向う岸の軒行燈の、東山の袖に提げた雪洞のやうなのが、まだちら／＼と點いたばかり。流に映るのも二片三片で、一足づつに暮近う、紅の視めが増すらしい。

礮に干した……。枯草が酔つたやうな……。赤合羽の上を、冷い風が靜かに渡る、と眞白な腹を翻して、ひら／＼と千鳥が飛んだ。比叡おるしが、雪にしようか、天氣にしようか、と密と様子を見に來たのであらう。それ、其の山の峰あたりを、寒い雲がスーツと通る……。飛梅の氣勢かな。あの、雲の動きやうで、星が霜に成らうも知れぬ。

「寒くはないかい。コオトを着て來れば可かつたつけ。」

「否、大事おへん、」と……。其れでも艶々とした黒い

毛皮の頸巻に、細い頤を埋めて言つた。

「貴下はん、寒うおすか。」

「私は男だ。」

「私かて女え。」

と、脣がちらりと赤い。岸には又一ツ灯が殖えた。

「此の橋は。」

「松原の橋どす。彼方のが五條の橋え。」

「あゝ、然うか。」

と云つたが、清之助は、此の際、御曹子牛若丸に失禮した。凡そ名所古跡を見るに、美人の案内者は宜しくない。如何な事にも、武藏坊さへ忘れたのである。・・・其の瘴薄明るく桃の下路を行くやうな、此の橋を、清水に向いて渡るのに、女に袿、男は狩衣して然るべしと思つたのに。・・・然も橋の上で、四五人の工夫が、どや／＼と來たのさへ、墨染の法衣に顛巻して、七ツ道具を背負つたと視めた。髯の生えたは奴殿。どれも大津繪のやうな人通、ト腰を極めて、ふら／＼躍るやうに擦達ふ。向うの、あの墨繪の廂の何れかには、鬼の面の看板掛けて、白酒を賣らうも知れぬ。

渡つて聽て中央にかゝると、嵯峨野に落つる日の影か、音羽の森の月の氣勢か、二人の姿が欄干かけて薄く映る、其の空へ、ふは／＼と被さるやうに、東山の薄紫が、一緒に落ちて、色を重ねて、橋も春めく下萌である。

ト此の京都が被衣した姿の、東山のなだらかな肩を掛けて、松

原橋の欄干越に、高いとも低いとも、何方つかず、他愛のない、空な處を、ぼんやりした、圓い形の、……光るでもなし、曇るでもなし、薄紫の紅がかつた、たとへば鳳凰の卵のやうなものが、二人の中を、お桐の黒髪の上あたりを、ふは／＼と浮いて通る。

清之助は、とぼんとして歩行しながら、此れを凝と見て居たが、橋の袂で、急に思出したやうに笑つた。

「あゝ、まだ護謨風船を持つて居るんだね。私は、何うも、先刻から、何んだらうと熟々視めて、景色も何も見ずに來た、橋の途中から氣が着いたんだが、」

「貴下、何や思ひやした？」

と一一緒に引合はせて持つてた袖を、白い手首で、少し開いて、ト上を向くと、白齒が幽。口で啣へたやうな護謨風船が、加茂川を離れようとして、ひよいと動いて、反動みもせず、二三寸ふはりと高くなる。

ちり／＼と千鳥が鳴いた。

「又悪く、黙つて澄まして、お前さんの頭の上を來るぢやないか。足もなくつてさ。」

「あら、」

と瞳を大きくして、

「風船に足があつて可いものだつか。でもな、薄暗うならばつて、絲が能う見えんよつて、ほんに、青い球ばかり浮いてますえな。」

と眞顔で言ふ。

「だからね、何んだよ。お前さんの名に花が咲いて、其奴が幻に出て、恚う、はつと簪から後光でも射して居るのかと思つた。……何しろ、お美いくつて居らつしやる。」

「ま、阿呆らしい、私が、何の……」

「眞個さ。」

「驕りますえ、ほゝ、そんな處覗きやはつても、鮎は賣つて居やせぬもの。ほゝゝ。」

と些と蓮葉な微笑。

橋を渡越してから、向通りの兩側は、皆綺麗な店で、人形の顔のほのめくのもあれば、清水焼であらう、大花瓶の颯と五彩に輝くのもある。其の硝子戸の中に、籠洋燈が粘いて居た。然うかと思ふと、藥屋らしい、看板の金文字の、晃々と、暗い軒に光るのもあつた。娘らしいのが、ぼんやりと奥と隔ての暖簾から、戸外を覗いて居たのもあり。

で、清之助は、物珍らしさうに、通りがかりに、其處等をきよろ／＼と見す處を、一足後れに背後から、笑聲を密と浴びせて、

鮎は賣らぬ、とお桐がからかふ。

鮎に一寸わけがある。

清之助は、お桐の導きで、今日は北野から壬生へ廻つて、大廻りに電車で先刻の處まで来た。が、其の天満宮から地藏堂へ巡る間を、相談づく．．．は可笑いが、お桐も望んで二人で歩いた。――途中、何處かの小路で、一人鮎を賣つて居た漢があつた。姫御前が、と云ふではなし、緋の袴と云ふではなし、魚屋が鮎を賣るに不思議はないが、さ、其の商つて居た場所が、大きな溝板を前にして、商家と商家の羽目板を、兩方から、しかも二三枚、どちらだつたか、引めくれて、壁の崩れを見せた眞中の、路地口の木戸へ附着けて、箒二つ臺にして、上へ莫座を渡したのに、活きた鮎の水を切つて、ぴち／＼するのを、ざらりと置いた。

金物屋．．．古着屋に．．．荒物屋．．．など、
どれも平屋づくりの低い家が、道から一段下つたと思ふ處に、件の大溝を前にして、頽然と成つて控へたから、何んでも場末には違ひなかつた。

が、青天井．．．とは行かない、空のどんよりとした、先づ露天の鮎賣。

其の日は、一體節分であつた．．．年越と云ふので、北野から壬生へ掛けて、洛中の老若男女の參詣が夥多しい。境内は申すに及ばず、道筋の處々、商人が澤山出て居る．．．處で、此の鮎賣も、東京ならば小父さんが、ト植木屋の灯を横取りに、薄暗く踞込んで、縁日宜しき處に、金魚を賣らうと云ふ格に當る。

處を、件のふなうりは、のつそりと頭を高く、木戸の上へ兀の
越すまで、大漢の肥つたのが、見ると下駄穿で突つた處は、見
越入道と云ふ體がある。……何を赫と逆氣せ上つて、あら
う事か、うしろ顛卷。看板のやうな洲濱形の眼鏡を掛けたわ。
はて、珍らしい。清之助は別に見る氣でもなかつたに、丁度此
の前を通る時、背後から聲も掛けず、唯地響がしたと思ふと、腕
車が揃つて、がら／＼と被つて來た。

「静としておいでやす、車夫衆が、よう避けはるよつてな。」
と今はじまつた事ではない。頻りに腕車が往來をするので、路
すがらお桐が言つて聞かしたものを。性根の据らぬ、おのぼりさ
んの癖として慌て、飛んで交したので、溝板をがたりと踏んで、
漸と大道に、身體を斜に堪へながら、其でもひよい、と車上を見
れば、眞前に練つて飛ぶのが、爽なりける紋附にて、イヤ塗つた
事、塗つた事！……男女七歳にして而して以來、京女郎は
色が白いと覺悟をした男にも、其白粉の分が分る。……素
顔の人もあるものを、如何な事、瞼にぱつと生臙脂で、頬の皺が
風に縮む。あゝ、其の上に情ない、受口反らした笹色紅。

其れが白襟の裏を眞紅に翻して、やがて乳のあたりまで、押寛げた衣紋首、兩天の笄、紅白の葛引して、漆のやうな島田鬘。

これは、と清之助が驚く途端に、お桐とは知つた中か、ニヤリ、でー眉をビリ、とさせると、車は人ごみの足を拂つて、眞中を敵つて四五臺。ー中には日傘さした圓鬘も交つたやうだが、初手の羅生門に度膽一を抜かれて、續いた眷屬はよくも見ず。・

「あれは？ お桐さん。」

「おばけどす。」

「え、」

と言ふ。其の拍子に、恰も其處で足を留めて、件の鮒賣の額を見た。事情止むを得ず、大入道の店頭に突立つた次第に成つた。

餘り近々と鼻の前に附着いたので、其のまゝ、然やうなら、とも言はれぬ段取。氣なしにぼんやりと、びく／＼動いてへし重なつた鱗を見た。

優しいお桐が又、おのぼりは（鮒を見物するもの）と悟つた風で、柔順に一緒にゐるのだが、推して案ずるに、九尺二間で、手鍋提げたり、水仕事の風がある。

鮒賣の入道は、黙つて、其の莫座の上の秤を取つて、ぶらりと紐を取つて下げて、目を刻んで、スイと分銅を扱いて、ちよんと留めると、きちんと水平に成つた處で、眼鏡の太棒の上から、八の字に白眼を寄せて、額で睨むやうに二人をじろり。

唯見ると、顔なり圖體なり、・・・・はて、誰やらに肖然、

と思出すまでもない。．．．清之助もつい昨日一昨日、道で逢つて其れだと聞いて、祇園新地を横行する、鬼なんとか言ふ幫間に其のまゝである。

清之助も可厭な氣がして、直ぐに溝板を離れようとしたが、妙にじろ／＼と凝視める入道の、其の眼の力で、其處へ押据ゑられたやうに思ふ。

片目で扱ぐい、と壓へて置いて、潤と其は二つたまゝ、片目を眠伏せて、うむと撓めて、一寸々々一寸。横に秤の目を一刃、と指して、じろり。二刃、と指して、じろり。三刃、と指して、又じろり。づい、と一渡り當つた、と思ふと、忽ぐわちやり、秤棹を引くり返して、莫座の上へ抛り出す．．．其の手もおかずに．．．

ずぶりと、蠱き合つた魚の中へ手を突込む、腥い臭が芬と立つと、ぐしゃ／＼搔廻した、と先づ思へ。．．．鱗と鱗が無慙に生きて、ざつと時雨の音を立てる、口々に、生れ故郷の湖を呻吟いたらう。ー魚尺は取らぬと言ふが、卜人指指ぐらゐな小さなのが、一つ翻然と勿ねて、莫座から溢出しさうに成つて、頽然とする。最一つ見事な、一尺ばかりなのが、下づみから、がくりと胸脈を打つて出て、ひく．．．ひく．．．とまだ皮の弾力がありさうに、身を突張る。と膏汗を流したらしく、二と鱗に光澤が添つて、眞黒な鱗が紫がかつて、鰓が金色に衝と照つた。而して、つる／＼と小肥りなのが、あの可愛い目を、濡々と黒く二つて、血が染むらしく紅を輪取る。

處を、大出刃の腹を返して、入道が、ひた／＼と逆に撫でた。

堪りかねて、清之助が衝と退く。

背後から、

「へッ、へッ、へッえ。」

と、氣味の悪い白晝の高笑。浴せかけて、

「切賣りもするんだでえ、へッえ、切賣りもするんだでえ。」

と吐出すやうな、あゝ、可厭な聲。

お桐がこれを、すかん、とでも言つたほどなら、清之助は然までも思ふまい。……

が、前に、遁げるやうに急足で、些と待合はすと、お桐が後から、静々と歩いて寄つて、

「あのな、氣にしゃはりますなえ。」

と却つて慰めるやうに優しく言つた。けれども、顔の色が白澄んで、寂しく曇つて見えたのである。――二條の停車場は近かつた。

其の廣場で、何處か野原を見通の、田圃に骨のやうな枯樹が見えると、カチノ、其れが鳴りさうに、けたゝましく風が吹いた。

颯と鳴るや、二つに分れて、砂烟を捲いて、大地を舞つて、眞赤に吹付ける一幅の中に、ざらつく霧を潜るが如く、車が宙を、停車場へ乗着けたのがあつた。――乗つてる女は、眞俯向であつた。

その風の一筋は、たゞと小石を叩いて瀬を作すばかり、裾を拂つて、ぶる／＼とお桐の婀娜な姿を揉むと、生際を引亂しておくれ毛が眉を掠めて、一つ撓つて耳朶に邪慳にかゝる。しつくり袖を取つて引合はせながら、屹と風に向いて顔を上げて、凜と二つた瞳は、其の途端に一際清々しかつた。

が、袖も襟もきり／＼と、引締めるやうに膚に搦んで、雪なす八ツ口、友染も、切細裂いた風情に見えた。其中で、

「一寸、」
と呼ぶ、……聲も掠れる向う風で、じりりと清之助に肩を寄せた。

京都は豫て、星の雫が霽に成つたも、凄じい、こんな風は吹かない筈。然も今日あたり、四條、三條、電車路も至極の凧で、お城から鶴が立ちさうな空模様だつたのに。――

清之助は、見る目も何もいぢらしいやうで、然も／＼名物の江戸のからツ風を、我が手で持つて来て打ちまけたほどに、其の迷惑を察する最中へ、ト呼懸けられて、これは定めし、苦痛を訴へられる事であらうと、ぎよつとすれば、耳に口をつけるやうに、横顔を持つて来て、

「言つて見まほかな、ほゝゝ」

と莞爾、埃にめげず、綻びた脣は、焼原に咲く紅梅一輪。

「今の、鮎賣な。」

「あゝ、」

「鬼……に肖然え。」

「眞個。」

と力を入れて、清之助は風に逆つて、ぐい／＼前へ出ながら、顔を見た。何うやら又一倍、臉のあたりの雲が重る。

「私な、恥かしおしたえ。」

と言ふ時、堪りかねたやうに、上まぶたを衝と伏せて、

「貴下はん、強う御迷惑どすな、私のやうなもんと一緒に歩行

かはつて。」

と、眞白な指の尖で、其襟巻を、つと合せた。

「飛んでもない事。」

とはかりで、目口の砂に、清之助は碌に口も利けなかつた。此のしばらくの間は、二人が只、曠野の中を行くやうで、他の往來は目にも留まらず。いくら吹きまくつてもびくともせぬ、蒼空に髣髴たる青い停車場を左に見て、此の時ばかりは、京都も浮世だと思つた。が、此の風の吹いて行く奥に、嵯峨があつて、寂として、綺麗な水が流れるさうな。……

片側町へ入つて行く……一方は寺の墓地で、まばらな垣に吹く風は留まらぬが、目に附いた石屋が一軒、何うやら壁を築いたやうで頼母らしい。

此處に成ると、ぞろ／＼と人が湧いて、頭も脚も動揺々々す

る……襟に一寸置手拭で、酔つたか、寒いかな、赤い顔して、白木綿の尻端折で行く媼さんも、野掛めいて長閑に見えた。

「草臥れやしないかい。」

「私だつか。」

「些と心許ないやうだね。」

「費下もな、私やかて、そない弱蟲やおへんえ。あのな、箱根のな、坂を上つた事がおした。」

「あゝあ、函嶺へ、これは初耳だ。」

「東京へ行く言うて、お客はんに連れられて行たえ、汽車が長う長うおすやる。よう寝られしいへん。鹽梅が悪うなつたよつて、途中で下りて、其の時だつせ。……函嶺へ着くと、すぐな、夜さりから、煩うてな、起きる事、……どうする事、なりへんやる。連はな、東京に用があるのどす、私一人置いて、つゝと去なはつた。」

京へ電報打て言やはつたけれど、私な、一人で居る方が氣安いよつて。」

と一寸軽い咳をする。……振の揃つて、白いのが寂しかった。

六

「私な、誰にも来て貰はずに、一月ばかり居たのどすえ。些と快う成つた處で、山道を出て歩行いた、坂も上つたのどす……」

「豪く言ふが駕籠なんだらう。」

と清之助は下駄の尖で、落ちた竹の皮を除けて通る。

「酔ふはけな、駕籠には乗りへん、私、馬に乗つたえ。」

「馬に。」

「呆れやしたか、お轉婆どすやる。」

と、おくれ毛を一寸搔く。

「お轉婆……が、しかしそりや、よく乗つたね。」

「其れがな、何んどす、ふら／＼歩行く中に、違つた他のな、

宿屋に居やはつた、西洋人と知合ひに成つたのだつせ。其の人が

馬を持つてどした。乗れ／＼言やはるはけ。私乗つたんえ。大き

な帽子被つてな、手綱曳いてくれはつて。柔順しい馬だしたえ、

其れでな、賽の河原いふ處へ行つた。……寂し、寂し。」

と四邊を見た。仔細構はず、京の人は、ぞろ／＼ぞろ／＼、茶

粥食やはる足取なり。

「私、恐怖うおしたえ、一心にな、此處のな、お地藏様拜んだ。

壬生は最う直きだつせ。」

「地藏様を拜むは可いが

ソレ見た事か。」

と清之助は前途を望んで、

「馬に乗つたツて威張つた處で、矢張り弱蟲に違ひはないぢや

ないか。」

「然うやかて、西洋人と、唯た二人ほか居いへんもの……

私、然う思つたえ。ま、死んで、好いた人はんと二人なら……

……と。賽の河原どすやる。馬に乗つて、悄然と、病上りどすや

ろ。芝居の引廻しのやうやおへんか。長襦袢も蒼うおした。あゝ、
思うた人のためや言うて、何んぞした事でな、殺されるのやつた
ら、嬉しおしようと思つたのどす。」

と細い手が、確乎と其の肩にかゝつた時、横顔をフト見れば、
鼻筋が通つて、鬢の毛が靜に懸る。風は止んだ、が吹曝した
あとの顔の色は、蟬のやうに白かつた。

清之助は言を外らして、

「しかし惜しかつたね、途中、病氣で滞つて。．．．東京
が見せたかつたよ。」

「否、又な、二度目にな、今度は東京へ行きましたえ。」

「いや、然うかい。で、東京は。」

「築地言ふ處で、水明館。」

「むゝ、ぢや苦勞人だ。何うだい、氣に入つたかい。」

「．．．．．」

「随分騒々しいだらう。あいつが名物さ、此地と違つて、」

「何うや知りへんけど、靜うかな、可い宿屋だつせ。」

「市中の事さ。」

「私、何處も見いへんもの。」

「何故さ。」

「また煩うて寝たのどす。」

「又わづらふ．．．．」

と思はす返した。

「旅するとな、西へ行ても東へ行ても、あきへんのえ。神戸へ
行た時もな、其の時は強うおしてな、病院へ入つたのどす。．．
．．何時もぶら／＼して．．．．こない身體何う成るやるな。
ま、あの莫塵へ上つた鮎だつせ。」

と、不圖ふとしたやうに振返ふりかへつて、屹きつと見た目めが鋭すろとかつた。

「姉ねえはん、お拜をがみ。」

「今日こんにちイは、姉ねえはん。」

舞まい子が二人ふたり、天あまの川かはの金魚きんぎよのやうに、薄曇うすくもつた空そらに映うつつて、綺き羅らびやかに、其處そこで辭儀じぎをした。

「おゝ、おでやしたか。」

「あい。」

「能ようお拜をがみやすや。」

「あい。」

と又また辭儀じぎをして、襲袖かさねそでの振長ふりながく、帶おびをひら／＼、と木履ぼつくりを、高たかく行く。

お桐きりは靜しづかに向直むかひなほつて、

「種次たねじはん、玉菊たまきくはん、髪かみがよう出で來きたえ。」

「大おほきに、．．．．姉ねえはん。」

「お桐きり姉ねえはん、大おほきに．．．．」

と一寸ちよいと振向ふりむいて、赤あかい襟えりで嬌態しなをして、二人ふたりとも、笑轉あくぼで莞爾にっこり。

「へい、お許し。」

と車夫が一人、これもお桐を擦抜けて、二人の舞子に添って行く。地蔵堂が近いので、最う車は通らぬらしい。

下駄がかた／＼と鳴つたので、群集に紛れて足許を忘れた、清之助が、はつと思ふと、石橋にかゝつて、根岸のやうな溝の上。

渡る、と土手に成つて、侘びた家が五六軒。何か中に隠れて居

さうな小家の風情、やがて紅梅もちら／＼咲かうし、蚊遣の頃は、

燃立つやうな緋縮緬が、夕顔白く居ようも知れぬ。一方水田で、

吹止んだ風の名残が、どんよりと砂烟をためた、裏を透かして、

處々藥研形に底深く、朗かな空が蒼い。其處から晝の月でも漏れ

さうに、刈稻の根が明いのであつた。

堂の屋根は、群集の上に、御輿のやうに顯れた。

清之助も可なり饒舌る。お桐も、しとやかなのは生得、

今日はもさ引の格で、裾を端折らないばかり、所體構はず話し續

けて来て、人混雑に揉まれ／＼裏門から入つたが、と階へは、眞

直には向はれぬ。

で、敷石の堦も見えぬ、ぞろ／＼眞黒な上で、鳩が、そくに突

立つたやうな形で、顔を擦れ／＼にほつと言ふ呼吸をして、目を

合はせた。

「御堂へ上らるかいな。」

とうつとりした眉をする。

「いや、御免蒙つて此處から拜まう。」

「堪忍おしやすや。」

と襟巻を取つて、片手拜みをする、其手に打着かつて行く締の

羽織さへあつたのである。

カチノ、ガグノ、と猿芝居が柝を打った。

何の木戸番やら、臺の上へ躍り上る。さて何處も變らぬは、活動寫眞の繁昌で。

「一寸……待つておくれやすや。」

と襟卷さへ重さうに、なやかに袖にかけて、お桐が片傍へするりと寄つた。する／＼と裾を捌いたが、褌がしつとりと打つ。

背もすらりと高いやうに見えて、……其處に荷を出した風船屋の前に、後姿でゝんで、少し屈み腰に肩を細く、帯がすつと、しなつて羽織のかゝつたのが、恚う……少い貴婦人と云ふ處があつて、且つ品の可い、華奢な母様の動態がある。

混雑な中で餘計らしいが、お桐は嬰兒の母様で、産後が漸々肥立つたばかり。で、稼業の方も、出たり休んだり、氣儘勤めはもつて來いの案内者には違ひない。が、清之助が太く其の疲勞を思ふのも、一ツは容體を憂慮つたのである。

お桐は、風船の色を選ぶのにさへ、下の絲から上へ見上げて、

「どれが、可うおすやる。」

其處へ、外套の下の懷手で立つた清之助に聞いた。

「紫のが綺麗で……欲いね。」

「可厭え、嬰兒はんのえ、貴下には上げへん。」

と微笑みながら、細い黄金の鎖をかすつて、氣取つた紙入を帯から抜いたが、出たのは大きな銅貨が可愛い。

「はい、はい、難有うござります……南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。」

と目を塞ぐ、風船賣は、頤にちよんぼり白い髭の生えた、面長

な翁おきなで、頭巾づきんを着きて居あた。

深草ふかくさから出でたのぢやないか。趣おもむきは受取うけとつたが、口上くちがしが些ちと可訝をかしい。

「何なんんだらう、小兒こどもの玩弄物おもちゃだものを、萬歳ばんざいとなりと云いふが可いい。……日の丸ひまるの旗はたでも押立おしたてゝさ、お念佛ねんぶつは陰氣いんきぢやないか。」

と清之助せいのおすけは、何どうやらお桐きりが鬱ふさいだらしく見みえたので、往來わつらいを仕切しきりの綱つなに添そひつゝ、門かどを出でながら然さう言いつた。

ものともせぬ風ふう。

「何なんのなあ、私等あてらが嬰兒やゝはんやはけえ、拜まがんでくれやした方ほうが可いいのだすえ。」

「私等あてらが嬰兒やゝはんだつて？」

と清之助せいのおすけは大眞面目おほまじめ。其その額ひたいの上うへに、紫むらさきの風船ふうせんがポンとある。

八

お桐きりは襟卷えりまきを引合ひきあはせて、

「何どうでな、こない母かあはん持もちやはつたよつて、嬰兒やゝはんは不ふしあ

「はせ 幸どす。……まめに、能う育ちしいへんやろ。護謨風船買ふのやかて、行末な、讀書手習しやはる思へば、前にお拜みした北野の天神はんで買うて來ますせ。歩くやうにもならはるか。ひよつとかして誕生過ぎんで、死なはりでもしたらな、賽の河原へ行かはるやろ。よつてな、……お地藏様拜むのだつせ。可愛がつてくれはるやうに、……而したら、風船屋のお爺はんが、お念佛言やはつて、私嬉しいやおへんか。」

と澄まして言ふ。

清之助はあしらひかねた。前刻の鮎にもぎよつとしたが、これは又通越した挨拶で、黙つて居られぬ處だつた。けれども此の雑沓の中で、兎や角附けたりを言つて濟まされる事ではあるまい。

「お桐さん。」

と更めて呼び懸けた。

「は、」と今のを忘れたやうな冴えた顔。

「もう少しと、静かな處は歩行けまいかね。」

「あゝ、貴下も静かな處が好どすか。」

「恠う揉れては叶はない。最う谷底のやうな處が結構だよ。」

「今些と辛抱おしやす。しばらくはな、西へ行ても東へ行ても、
同じ事にきつおすえ。」

と聞き、清之助は、杭が立つて、其處で綱の留まる、丁字形の突尖に立つた巡查の顔を見た。

髻はあるが、柔和なもので、若旦那が舞臺へ出た風に、靴を踏

違へては莞爾々々をして居る。……いや、所替れば品替る。……東京の女連れだと、ゾツとするやうな電がほとばしるが、此處のは衣囊から煙管が溢出す。

と立淀んで、見る處を、

「わい。」と呟いて、女の聲で、驚かしたものがあつた。

「や、何處へ。」

「何處へもないもんや、貴下はんが行方知れず、迷子に成つて了やはつたで、見なはれ、皆が連れまうて、鉦太鼓で捜しに出た處だつせ、ほゝゝ。」

と大聲で笑つて、緋縮緬の前垂を挟んだ帶の處で丁と手を拍つ。清之助が宿つた、木屋町の旅籠屋の年増の女中で、元氣の可い豊肌もの。成程三人ばかり、見知越の同じ朋輩が連立つた。

梅には早し、正月過ぎ、旅のものは餘りない。宿屋も隙で、手隙な女中が、御堂へ參詣は分つたが、赤前垂は些と解せぬ。

「何うしたい、御袴着用は？」

「これかいな。」

と不器用に引摺んで、

「ばけたのだつせ、仲居はんには。……昨夜あたりも、萬亭や大嘉でお見やしたやろ。……貴下はんには御馳走え。」

あとの少いのは優しく莞爾々々して居た。

「御馳走よりか、……實はね、何處か其處等から電話で然う言つて置かうと思つたんだよ。一寸話した通り、今夜發足んだが、これからまだ見物して、緩り晩飯でも食つてると、汽車の時間で慌てにや成らん。部屋に散らかしてあるものを一纏に引包んで、革靴へ突込んで置いて貰はう。大事なものは一つもない。」

お前さんが好きな粗雑で可い。」

「あない言やはる、どもならんえ。」

と大鬚圓鬚を押振つたが、

「言やはるな、合點で居る。お江戸はんなんかに差圖は受けんえ。そないな事は、前刻承知や。ちやつと若旦那から電話があつたえ。」

と胸を敲いて言ふ。此の若旦那が、清之助の友達で、此の度の京見物は、諸事其のはからひ宜しくであつた。

「そしたら何どす、此から嵯峨へ行かはるか。……最う行かはつたか。」

「まださ。」

「若旦那は、貴下が、北野から二條へ戻つて、嵯峨へ、行かはると、こない言うてどしたえ。ちやんとしやはらんと遅いがな、どないなもんえ。」

「汽車はゆつくりだつて、然うのんきにはして居られない。嵯峨と云ふ話もあつたけれど、行つた處で、此の様子ぢや日が暮るで、今度は先づ見合はせただ。これから清水へ行くんです。」
と忙しい處で、時計を見た、彼は四時半。

「はあ、清水へ、そりや思ひ付きどす。えらい可うおすがな。」

貴下はん、氣をつけて行なは、お連がある言うて面白づくに、音羽を越えて、兒ヶ淵へなぞ、行てはならんえ。」

「何んだ、矢張名所かね。」

「名所や云うて、藝子は心が心中をしやはる淵やえ。」

「馬鹿にするな。」

と笑ひ棄てると、案内眞面目で、其のまゝ擦違ふ清之助の外套の袖を、込合ふ中の人知れず……ぐい。

「今日の貴下のお連はんは、姉はんがな、つい近い頃死なはつたんどす。」

と帽子の鍔から、顔を見上げて小さな聲。

「それからな、妹はん、」

と愈々低聲で、

「……お連はん、可うすか。日が暮れてから兒ヶ淵へ行かう行かうと言うて、人を誘やはる。誰も、もう行き得ん言ふ是沙汰だすえ。氣をつけておくれやす。」

清之助は胸を打たれた。

「人によらあな。」

「ま、其の氣でおいでやす。」

「行ておいでやす。」

「然よなあら。」

女どもが口々で。

ト別れようとしたが、密語くにもせよ、其の噂が出たくらゐ、お桐は、人に隔てられて、一寸前後に見當らぬ。

はてな、とニはしてきよろ／＼すると、巡査が顔を見て、ニヤリとして、黙つてぬい、と象の鼻のやうに腕を伸ばして指をする。波打つ帽子、廂髪、銀杏返、頬被、きんか天窓の動揺めく上を、スイと離れて、眞珠貝が氣を吹いて、月夜に飛んだやうな紫の球がスボンと浮く。

はつと帽子に手を懸けて、巡査に目禮をする背中を、身體ごと横なぐりに、年増の手がドンと来て、

「あれ、風船球お見なはれ、貴下の魂が抜出てます。」

微妙くも申されける哉、姉様。

清之助は群集に潜つた。

お桐が浮出したやうに待つて居て、――

「……又鮒を見てお居やしたか。――」

此處で又、五條坂の薄暗がり。で、荅の中から鮒がひらり。

「其の鮒を言ひつこなし、思出しても可厭な氣持だ、鮒だ鮒だは不可いよ。……お前さんは師直だ。」

と二人竝んで歩行き出す。……お桐の黒縮緬の色が隠れて、一ツ星の下を、紋が白い。

お桐は眞直に道を拾ひながら、

「而したら貴下は判官はんか。肖てどすせえな。」と、一寸横

顔。

「腹を切らせようと云ふ謎かね。……成程些と……」

「

と行詰る。後に縋つて、

「些と何うおしやしたの。」

「京都ぢや空腹は不可いんだつけ。……北山は巫女所

で、口を寄せると云ふんだつてね。」

「知らんえ、ほゞ。」

「いや、随分切つても可い。」

「而したら私、何うしような。」

「三千歳ぢやないが、其の時は、御飯を八杯もめしあがれ

さ。――あの娘は眞個に可愛いね。簪の晃々で、錦を蠟燭に照ら

しながら、きちんと高麗縁に坐つた處は、姫君入らせられませう、

と見えるが、さあ、と成ると、置炬燵を振袖で飛越すんだ。蜜柑

の露も、咽喉へ通らないやうに、尋常かと思ふと、冷酒を湯呑で

呷る。……

十

「つんとして居て、氣取らないで、澄ました中に人懐こく、仇

氣ないのに、よく氣が付く。……此の間も床側の丸窓を、ひよいと跨いで入ったのが、月の中から出たやうだつけ。不作法に見えない處が備はつた人品です。……あれぢや樹登りもしかねまいが、裾が綾に掛つたら、枯木も珊瑚に見えるだらう。だから眞個だとさ。御飯を八杯食べたと云ふのが、其れがね、廂髪の姉が、金米糖が咽喉へ支へて、目を白黒したと云ふより、餘程華奢に聞えるから可いではないか。」

「だと、私がそんなに食べたなら、御飲が此處まで、」
と指を反らして、頤を掬つて、
「充溢え。……而したら咽喉を突いた時、」
と寂しく笑顔で、

「汚つおすやる、な。」と、眞顔で言つた。
……此の話は、清之助が、随分腹を切らう、に返して、
自分は何うせう、と言つた續きである。……又黙らせられた、おのぼり氏。

お桐は小さな吐息して、
「綺麗な血が出たら美しおすやる。死ぬるにはな、咽喉を突いた方が可うおすやるか、女子は然したらいかつい？ え？」
と澄まして、言ひつゝ、次第に坂へかゝるのを、引添ひながら、唯姿を見れば、随分今日は遠路をして居る。……荒い風には當つたり！ さすが、引束ねの花月巻こそはら／＼と亂れたれ、衣紋も瘦ぎずにひつたりして、羽織の紐の傾きさへせぬ。途中の小休みにも、陰で然うした處もなくつて、揺直しもせぬ帯ながら、唯心持、下締の緋の結目が、押合ふ人中でずるりと廣く緩んだばかりで、急ぎ足にも裓が崩れず、膚を包んで婀娜な裳の松葉も散

らさぬ。．．．一體が京の女は、裾を些と長めに着るが、其れにも駒下駄の齒も見えないで、恚う、黄色いやうな、薄赤いやうな、青いやうな路が、上から朦朧として落ちて、天下る雲に引包むで、お桐を押上げて行くか、と見える。

婦人が氣にして繕はないのに、襟も崩れず、振、八ツ口もしつとり着いて、刻みつけた中に白脛の進むやうな、端然としたのが通越して、寂しく凄いやうに成つたのは、兎もすると胸に覺悟がある。．．．世にも人にも離れて行くのを、紳が鬼かゞ引添うて導く時に、フト何んとなく顯るゝ相好である。

と清之助は其の心覺えがあつて、思はず前後が視められた。

來がけに、大構の白い門に、醫者か、病院かと思ふ、瓦斯が點いて大玄關に電燈が一ツ、寂とした灯を見てから、此の邊しばらくは、ちらりとある灯の影も見なかつた。

人家に離れたのではないが、なぞへの土塀について上る。．．．塀の内は植込ながら、すく／＼と松が茂つた。

あるいは見えるが、見えるほど、お桐の姿が、裾ばかり色めで、足が暗い。

他なら手を取つて引揃したらう。

が、さして行くのは音羽山、音羽の灌の音に聞く清水寺の觀世音。夜の暗さも御袖の雲の楊柳の蔭ぞとよ。

あゝ、また一つ星が出た、大慈の露の光輝であらう。

紫の球が浮いてー翁の髯がぼつと白い。

「お桐さん、最う直きかい。」

「草臥れやしたか。」

「いや、私は男だ。然う云ふと又私やかて女どすえ、言ふだらうが、氣の毒に随分歩行かせたね。．．．．間は電車だと言ふものゝ、北野から壬生までがなか／＼ある。．．．．あれから町通りを二條まで、．．．．何處だつけかね、眞中を用水のやうなのが流れて居て、軒並揃つた賑かな通りの、向う横町から、幟を何本もひら／＼と立てゝ、眞赤な上下を着た親仁と、椎茸髻で袴襦を端折つた毛脛を出した若いものが前に立つて、大勢道中笠で練つて來たつけ。」

「あれもおばけかい。」

ツて聞いたたら、年越のおばけは女ばかり。．．．．あれは京極の芝居で、重の井をする廣告だつて、お前さんが笑つたつけね。彼處等ぢや最う坐りたかつた。口ぢや男だと言ふんだけれども。」

十一

「漸と電車に乗つたので、何うやら一呼吸ついたほどで

す。．．．其れも込んだから、お前さんは立つて居たんだ。
北野へ月参詣をするんだつてね。あの湧立つやうな中で、御膳
を供げる、お前さんを見て、受付けが顔馴染らしく挨拶をした。
そりや行くには行くんだらうが、往きがけ二條の停留場で、北と
南と電車を取違へた案内者と云ふものだから、．．．電車に
さへ滅多に乗らない、何時も車なんだらう。――
病氣上りだと言ふのに、其の身體で、可いのかい、お桐さん。
坂も思つたより急だ。然うしてずん／＼勢よく上るが、我慢を
するんぢやないかい。何故か顔色もよくない。暗い所爲か知
ら。．．．眞個に私にしてくれるんなら、然までには及ばな
い。疲れたら言つておくれよ。」
と些としみ／＼となる。．．．

沈んだ中にも、お桐は元気で、
「よう案じておくれやす、嬉しうおすえ。けどな、私氣がせい
／＼して足が軽いのえ。．．．身體にも歩行く方が可いのだ
す。．．．其れに、清水はんへ上るのよつて、尚の事勇む
え。――今日は何うしたやろ、此の様子やと、まだ／＼な、一里
二里、辛い事些ともおへん。」
「だつて、呼吸が何うも發奮むやうだぜ。」
「寂寞な所為どす。貴方が私に聞える。弱いえ。――私、動
悸も打たんだつせ。嘘なら一寸觸つてお見やす。けどな、貴下
の手が觸らはつたら、何うやら知れへん。」

空谷の聲音、くわつと響いて、前途の暗まぎれを、とつ／＼と
靴の音。垣を築いたる如く、高等學校の制服着たのが、三人、二

人、三人と、雙六の目にきちんと揃つて、雲の湧いたやうにむら／＼下りて来て、傍目も觸らず下へ通つた。

天下泰平如何に清水詣と、些と此の同行二人の體は、諸君に對し憚りあり。．．．清之助は俯向いて過ぎた。

温鈍屋、ぜんざい餅など、一つ二つ燈が見える．．．がら／＼と戸を鎖す繪葉書屋の店もあつた。夜は人通もないらしい。

「今に、あゝして學校へ出るんだね、小兒があつて樂みだね。」と護謨風船のいきさつは忘れたやうに故と言つた。

「嬰兒はんどすか。」

「あゝ、然うさ。」

「私の許のは女子どす。」

成程、其處までは知らなかつた。

「ぢや、尚の事可愛いだらう。」

「憎い事おへんえ。」

とわけもなく言つたものゝ、葛の葉でなし．．．口では留まらぬ。袖口を引合はせ引合はせ、護謨風船を持つて居ようではないか。風が大分染む、．．．ひり／＼と来て、外套の下でも手を出すのはつらいほど寒じるのに。．．．誰がための玩弄物であらう。此の母親の指一つ離れたら、紫は忽ち消える。唯此の細い糸のやうに、嬰兒の縋つた絆を、どんな風が揺ぶつて、世を拗ねたことを言ふのであらう！．．．

「憎い事ない、くらあぢや不可いぢやないか。――抱くかい？」

「え。」

「小兒は抱いて寝るのかい。．．．いや、あゝ夜更しをする稼業ぢや、思ふやうに不可まいなあ。．．．」

と半ば獨言に成つて、一寸黙つた。

「乳母が居るの？」

「はあ、好い人だつせ。」

「其れでも間がありさへしたら、些少の間でも抱いてお遣りよ。でないと情愛が薄くなるとさ。」

なぞと言ふが、そんなら私が邪魔をしないで、今日一日抱かせれば可いんだ奴だ。男の言ふ事は恚う間違ふ。……言ふ中にも是だから客は不可ん。我ながら間違つてる。處を、商賣なら勤めねばならない。そんな、こんなで、お前さん、串戯にも果敢ないことを言ふのぢやないかい。」

十二

お桐が何んにも言はないで、少し顔を上げて流眊して、ぶる／＼と頭を掉つた。――此の明瞭で且つ簡單な打消しで、疲れたらうの、寂しからうの、気兼ねも、心扱ひも、慰めも、する事はさりとなない。

其處で、

「お父さんはあるの。」と聞いた。

夜の色が、色香も返事も隔てたが、

「嬰兒はんの父はんかいな、私の父はんかいな。」

と暗紛れに聲がする。此の言は、罪もなく報もなく、仇なくう

ら若く、清之助の耳に響いて、キヤリと胸に應へたが、さて、自

分にも其のどちらを聞くのだつたか、俄に見當が付きかねた。

猶豫つて、夜を刻んで、

「お前さんのさ。」

「内に母はんと居やはります。」

「あゝ、阿母様も達者なんだね。」

と急に勢よく言ふ。

お桐は力のないものいひで、

「お母はんは違つとるのだつせ。」

「え、繼母かい、いや、其れは。」

と又思當つたが、引續ければ同じ事を繰返さねばならないの

で、

「而して、嬰兒はんの父はんは。」

「居やはる。」

と軽く言つて、身動きをする袖が觸れた。衣摺れがさらりと音

する。ま宵だのに・・・名所の坂は名ばかりで、寂寞りと、

何んにもない。しばらくは家並も途絶えた。

清之助は、我が聲音の高いのを聞きつけて、時々耳を澄ますやうにしたけれども、お桐は裳の氣勢のみ、駒下駄がすつとも響かぬ。

「ぢや、心配をするがものはない。其の父はんに然う言つて、もつと何時も嬰兒はんを抱けるやうにしてお貰ひよ、……不可いのかい。」

「出来んことおへんのどす、……商賣な、留めよ思へば留められるのどすえ。お金子も澤山くれはる因つて、勤めも氣儘やはけ、今日のやうに運動して遊ぼ思や遊べるのえ。」

「其のくらゐで何故で藝妓を留めないのだね。旅のものが遣放しに、心にもない深切めかすと、つもられるかも知れないが、いや、實に好いてすべきものぢやない。早い話が、お前さんが、餘所の娘なり、極つた夫のある人なら、何も嬰兒はんを内に置いて、一日私と一緒に歩行かなくつても濟む譯だ。」

「氣障がらずに聞くさ、可いかい。」
と一つ壓へて、

「まだ、まあ、お前さんくらゐから、最つと年上の連中は、善いにしる悪いにしる、好勝手も知つて居るから、些とは勝のやうなものだが、舞子と成ると、實にあれは情ない。中にや乳首より堅いものは當らないほどな口へ、かち／＼し杯が打附かる、あれは何うです。……客も酔つてりや有頂天で、分別もなく飲ませもする、又小兒たちも無我夢中で、まくりの氣だらう、がぶ／＼遣る。背中を断割り鉛の熱湯、體の可い拷問呵責さ。何んのは事はない、鷲の口を捻開けて、鹽を嘗めさせると同じ事です。……お節句の白酒だつて、お雛様の口の端へ附着いたら何んと見える？」

昨日だつつか、芝居で見たが、極彩色の綺麗な處が、十四五を頭に、十、十一ぐらゐまで、七八人、新高の出張り假花道の附元と云ふ、衣服なら襟の處へ、赤いのがずらりと竝んだ。

竝ならんで、何なんかの幕まく合あひに、鰻うなぎか、鯛たひか、井どんぶりを揃そろつて持もつたが、あの板いたのやうな帯おびを張はつて、うつむきもしない行儀ぎやうぎは可いいが、土間まへ向むかつて正せい面めんを切きつたは何どうだ。然しかも其それですよ、……膚はだへたゆ撓たまず目めまじろがず、雀すずめのおむすびほど割箸わりばしで搔かほじつちや、すか／＼遣やる……人間にんげんが飯めしを食くふのに、胡坐あぐらも立たて膝ひざも遠慮えんりよをしる、と云いふんぢやないが、あの洒しやあ亞あとして取澄とりすまして、是見これみよがしに臆おくめん面めんのない様やう子を、京きやうの人は、私わたしは知しらん。旅他たひたこく國こくのものが見みると、いや、見みる方ほうで極きまりが悪わるい。

江戸えどぢやないね。

十三

「が、何なにも可哀かはい相さうに、子こどもたちが悪わるいのぢやない。前々まへへくからの習慣しきたりで、あんな稼業かげふを、派手はでな、立派りっぱな、豪えらい事ことと思おもふから、正ま的とに向むいて恥はづかしくも思おもはんのだらう。江戸えどぢや俯向うつむきます、皆みんな一寸陰ちよつとかげになる。今時いまときぢや、何處どこの何處いづこも、藝妓げいしやをして極きまりが悪わるい、と自じ分ぶんで思おもふものなからうが、其それでも舊もとを受けついで、

誰も言はないが自然に卑下をするのが床しいのさ。で、何んとな
く、世の中から槍襖を造られて、穂尖を握つて突立つから、其處
で商賣人は身がしまつて、身體もきりりと、氣に意地も持ち、張
も出る。

此地のは手放しです。一寸見ると、羽を廣げて自由に飛廻るや
うだけれど、……其の實は、祇園なら祇園と云ふ大きな籠
の中に入れて居て、目には見えぬが、其の區劃の中を出ないのぢ
やないか。おまけに舞子などは、長い翼に縫上げがしてあるから、
袖が重たくつて振切れまい。

處で、振切れない其の翼を開かう、籠を出ようと、悶え、焦る、
と見る目には無慙だが、しかし外には廣い世界と、巢なり埒のあ
ることを知つて居るだけが幸福で、機會があつたら出られもしよ
う、傍から救出すにも手懸りがある。

が、籠の中で孵化つた金絲雀は、戸を開けると恐怖がるだらう。
土鼠は日を拜むと眼を眩す——舞子も矢張り、籠で育つて果てる
んだね。……其れをあはれとも云ふ事が、皆がまはりへ寄
つて集つて、綺麗だ、妙だ、と、賞讃す。……御覽、煽ぎ
やうが烈しいと、扇の風でも蠅燭が消えるんだよ。

串戲はよして、お桐さん、自分も早く身を堅めようし、忘れて
も、嬰兒はんを舞子になんぞしようとは思はないが可い。風船は
親が持たせるし、銚子は客が持たせます。……

否、否、そりや然うさ、然うさ。可愛い兒を舞子にしようとは
思ふまい。——此の土地ぢや、母子代々と云ふのが多いさうだが、
ね、其れが今言ふ、金絲雀の卵だよ。が、お前さんは、様子を見
た處でも、小兒を賣物に出さうと思ひさうな人ぢやない。ないが、

土地に居て、然も親が其の商賣ぢや、見やう見真似に、可い事とばかり思つて、小児の方が其の氣に成つて、新高で、幕間で、揃つて正面を屹と切ります。其處が、金絲雀の卵なんだね。

いや、まだ誕生前だつけね、嬰兒はんは？

と心付いて、思はず笑つた。

「が、其れなら尚可い。疾く其の嬰兒はんの父はんと相談して、苦界を抜けたら可いぢやないか。何かい、然うしてくれないのかい。」

「それはな、私が、望むなら、ひかせる言うて。」
と切々であつた。

「ぢや、何かい、向うには極つたのがあつて、父はんの内へは、お前さん入れないのかい。おかみさんに成れんだね、……お待ちよ、其處は又些と考へものだがな。」

「おかみはんは居やはりはせんのだす。」

「ぢや、何故、考へる事はないぢやないか。」

といひながらフト思つた。

「あゝ、舅があるのか、はてな、舅姑があると成ると、些と煩かしいか知ら。」

「何んの、舅姑なんかあるのやおへん。」

「小姑も、」

「はあ……」

「むゝ、では、お前さんの親たちが不承知かい。」

「母はんもな、貴下、」

と特に繼母を言つて、此處で聲が曇つた。……清之助は又血に響いた。

「お金子澤山くれはるよつて、不承知なことないのどす。」

「可、」

と故と勢よく、笑を聲に含ませて、

「分つた、お前さん情人がある。」

「え？」

「間夫が、情人があるんだらう。」

「欲しうおすえ。」

と聲を切めて、驚くばかり力が入つた。

「私、祇園の小鳥どす。知つてまつせ、――誰も籠の外を知り

やはらん、金絲雀の卵どす。其の親どす。……真綿の中に

くるまつて、ぬくとう氣やすうして居やはる。紗綾縮緬着てな、

西陣の帯締めてな、裾一杯に飛びやはる、袂を開けて舞やはる

え。」

十四

「其のな、祇園の藝子入れに、美しい鳥籠はな、玩弄物にする
人が大事にしやはるよつて、雨にも風にも當りはしやせん。世間

のな、苦勞しやはる女衆が、涙拭かはる袖に鼓抱いて、御飯焚き
やはる手で、茶の湯して居るのどすえ。けどな、矢張り籠の中に
居るのやはけ、山雀の藝當だつせ。

藝はせいでも、山雀は山に居るのが可いのだす、撞木渡りより
か小枝うつりして、地唄歌ふよりチロノ、轉つて居やはる方が、
なんぼ可い藝や知れん。藁屋で聞いても、御殿で聞いても、手に
取られん、位が備はつて見えるのどす。

野に居る鳩は羽も光る・・・動物園の孔雀はな、綾錦の帯
擴げても艶がおへん、と私思ふえ。淨瑠璃の文句にかてな、姿を
トンと投入れの水仙清き言やはるが、夕霧はんは活けた花。――
私は陰でも根が欲しい。屋根の下に生えゝでは、雨も風も強いや
ろが、其のかはり、天から直接の日が當る・・・其のな、
日の光受けるためなら、霜も乗せうし、雪も被ぐえ。雨風何んぞ、
槍が降つて大事ないえ、なあ・・・

然うやかて、私なぞ、其の、日の光には遠いよつて、先あ前へ、
霜が欲しい、雪が欲しい、身を切られたい、凍えたうすえ。

何んにも知らぬ籠の衆は、世の中からは花笠で圍はれてる思う
てどす。京の藝子も氣がつくと、槍襖がよう知れるえ。

今日は貴下が言やはつた。眞個に！私はな、其の以前、函嶺で
な、其の馬牽いてくれはつた西洋人から、籠の外、山な、森な、
埒も巢もある事を、はじめに聞いて――其の時分つた。

金子澤山くれはる言うて、撫で擦つてくれはる言うて、棹竹持
つて狙うて歩行く、雀さしが何んになる！・・・嬰兒はんの
父はんかて、雀さしや、え、貴下。――

と肩を寄せた。鳥の翼が、襟卷のあたりか知らず、外套の袖を
透して、清之助は、身に沁むばかり慄然とした。

「皺しわくたのお爺ぢいはんやが、其それの私あてえの塀ねくらどすか、巢すどすかいな！・・・私あてい可いや厭ええ！」

と強すねたやうに、身を揉もむ留南木とめぎが暗くらがりには、はつと散ちつて、「天てんから射きす日に照てらされたうすせ。其その前に雪ゆきが欲ほしい、霜しもが欲ほしい、苦勞くらうがしたい。私あてが恚かうして煩わづらふのはな、昔むかしの話はなしに言いひますやろ、蒲團ふとんに寝ねかした金魚きんぎょの所せ爲いや。生命いのちの水みづに入いれたらな、上うへへ氷こほりが張はつたかて、何食なにたべいでも生いきて居ある！・・・嬰や兒ゝはんお乳ちくが欲ほしかるけれどな、・・・其その母かあはんは、氷こほりの下したの水みづが欲ほしい。・・・氷柱つらつわ割わつたやうなのが、咽喉のどへすつと通とほつたら、何なにほど胸むねが透すくどすやろ。其その一し雫じくもないよつて、呼吸いきが詰つまるやうで死しぬか思おもふ。辛つらうおすえ。」

と弱よわい聲こゑ。

「お桐きりさん、情人いろが欲ほしいね。」と、清之助せいは串戯じやつたんではなく、しみ／＼言いつた。

「・・・」

「ね、然さうに違ちがひない。」

「知らん。」

「何なに、生娘きむすめぢやあるまいし、藝妓げいしやが情人いろに不自由ふじゆうをする法はふがありますか、明日あすからでも拵こしらへれば可いい。」

「東京とうきやうでは、直ぢき出で来きますかいな。」と言いつた。

一句、清之助せいを割くつたのである。

「京きやうではな、駄目だめだつせ。そりやな、今いま、恚かうして、貴下あんなはんに話はなしたやう事こと言いうてお見みやす。此この京きやうの人ひとやつたら、明日あすまで待ちまちやへん。・・・途中とちゆうから、家うちへ歸かへつて、直ぢきに金子かね持もつて来きやはりますえ。其それで出で来きる情人いろどすか。

私あてが言いふのは、兩方りやう、命いのち。

最惜いの、可愛いの言うたかて、死ね、死なうとは誰も言やへん。
す・清水の山の奥にな、兒ヶ淵言ふのがあるのだ

清之助は、思はず、

「む。。」

と、唸るが如く頷いた。

十五

「書問は思はんえ、月の良い晩でも、暗夜にでもな——其處へ一緒に連れて行ておくれやす。——いくら頼んでも、随分と、酒のんでいきあはる人もあるけどな、来い言うて、連れて行つてくれはる人さへないのだつせ。」

好いた男でお見なはれ、女子やな、私なら、戦争にかて跟いて行く。

卑怯だつせ、情がない。金子やるから人大勢雇うて行け、兒ヶ

淵へ、．．．と、こない誰も言やはるのどす．．．大江
山の仁輪加やないえ、四天王連れて、山へ行って、何うするのだす
えな。私え、可厭え。」

「お桐さん、」

と更めて、

「而して、もし連れて行く男があつたら、夜々中、其の淵へ行
つて何うするつもりだね。」

「あの、互に生命と生命なら、其處で二人で死にますせ。が、
な、私なぞ、そんな事望んでもあかぬはけ、せめて其處まで送つ
てくれはる、優しい人やつたら、私一人飛込んでな、後世弔らう
て貰ひます。」

「あゝ、危い。」

と躓いた手を取ると、竊と取つて、

「恥かしいえ、こんな事、貴下に話して．．．．．歸らはつた
ら、おかみはんはんに黙つて居ておくれやすや、東京の女子衆に笑は
れまつせな。」

「お桐さん、ぢや連れて行く、と言つたら私とでも可いかい。」

「え、行つておくれやすか、さあえ！」

と、ぐいと取つて、すつと急ぐ．．．．．清之助は足が浮い
た。が、お桐の姿が臍に立つた。

「いや、然うすると、ーお待ち、東京へ歸つて話したら、私
の方が笑はれる。相談を掛けられて、女が行きたいと言ふ處へ、
和蘭陀見物と言ふのぢやなし、たか／＼音羽の山一つ、連れて
行かれぬ法はない。けれども、何故か力がない．．．．．此の
様子ぢや、ものは串戯にしる、お前さんが、淵入らうとすると成
ると、私の腕で立派に留められるか何うか分らん、かつてお桐さ

んは殺したくない。」

「而したら一緒に、」

と振り向いた、笑顔が慄然とするほどで、

「死にましよか。」

「む、まあ、参詣をして考へよう。」

四遠を見ると、早く部を下ろしたが、兩側は、ずらりと竝んだ商店で、フト虹が立つやうに明る成った。羽目を洩れ、節穴を透く燈の影が、ちら／＼と坂へ流れて、狐火を見るやうな。

音羽の樹立が城を築いて、中空に梢の尊い、清水寺の大手下りに、天さがる坂の上からする／＼と下りて来て、白が鼠に濃く藍になり、浅黄に顯れ、霞に仄に近づくまゝに由縁の色、紫颯と袖を長く、藤の花を地摺りの姿で、裾を末濃にゆら／＼と中脊ですらりとしたのに、最う一人、燃え立つ牡丹の花片一つ、赤い手絡の圓鬘を艶々と大きく結つて——成程遠目に見えなんだ——くすんだ濃い茶の詰袖に、石持の三紋、黒繻子の襟かけて、緋縮緬の前垂蓮葉に、浅黄の蹴出を仄めかした、服装は菜種に蒼空ながら、脊丈はいたいけな撫子ほどな、と見ると十二の舞子が別に。・

紫なるは熨斗目の袖、衣紋凜々しき小姓扮装で、白博多の帯を歌留多結び、目鼻立すつきりと、雪のやうな細面に、黒髪の鬘を豊に、繪を見るやうな若衆鬘。・・・扇子を斜に胸をせめて、きり／＼と帯にさしたのが、腰の絲の青柳に楊弓の箭のそれたやう。其の圓鬘を肩のあたりへ、すらりと脊高う手を曳いて、見迎へ顔が穂に出でつゝ、薄のやうに靡いて来る。と此の何處までも包ましく、もの騒ぎをせぬお桐が、思はず喝采と調子高に、

「おゝ！」

と言つて、はつと出合つた。角に兩方家を挟んで、産寧坂が、三人の姿で分れて、雲のやうに左へ走る。……

顔を合はせて、

「あれ、三千歳はん、岸勇はん、よう、おばけやしたえなあ。」
熨斗目の藤は年紀十六、圓鬘に結つた撫子は、其の乙で十三の、舞子二人は姉妹と、清之助も知つた中、我を忘れて見惚れてゐむ。……

十六

「清水様へお参りやしたか。ようお参りやしたえ。」
お桐が、二人の振袖の裾と前垂の端とを、伏目に見るやうにして言つた。

思懸けない舞妓たちが、美しい此のおばけに、そゞろに成つた氣も、最う沈んで、姿も復其の氷の下の水に臨む。

「は。」

と言つて其の扮装を、出合つた連れの清之助に、恥らふ風情で横に背いた、浅黄の襟に頸の雪、おくれ毛のたゞほんのりと曇つた他は、笑靨も頬に透過つて、此の宵闇に月の顔。

妹の岸勇は、濃い紅の口元が、墨を嚙んだ徒な手習兒のやうに、莞爾すると、圓鬚も据腰の嬌態を造つて、姉の袖を一寸取つて、

「どないなもんや、お桐姉はん。」

と澄ました顔。

「眞個、好いお若衆はんや、けなるおすな。何處から連れまうておいでやした。」とお桐は岸勇の其の様子を可愛げに、あやすやうにして言つた。

「兒ヶ淵からどす、なあ。」

顔を見る。と見返つて、

「何言ふのんや、」と、三千歳が、鈴を振るやうな聲して、たしなめて、遞つて、裾を軽く、此方に振り向き、細面なのが優しい目で、

「姉はんは、おばけはしやはらなんだんのか。」

「ばけてますせ、お見やす、．．．東京の奥さんに．．．」

更めて清之助に肩を竝べた。角家の戸の隙間を、絲のやうに洩れ来る灯が、眞黄色な細い霞で、袖を縫合はせた模様に見える。

「先夜は失禮。」

と熨斗目の袖を、ひらりと翻して會釋する。若衆鬚の元結も背筋の紋も際立つた。

「あゝ、綺麗だね、二人とも。何より増な土産が出来た。．．

．．．而して二人切でお参詣したの。」と清之助は、其處から姉妹が歸るらしい産寧坂が、穴のやうに眞暗なのを見て尋ねたので

ある。

「豪いね、感心に寂しくないね。恐怖くはないかい。」

「はあ、些とも恐怖ことおへん、なあ、岸勇はん。」

「私等が、おばけやはけな。」

顔を見合はせ、何故か二人が向合つて、花やかに吻々と笑つた。

「えゝ、えゝ、えゝ。」と言ふ聲が、暗がりの中に掠れて聞えて、むく／＼と、灯離れた坂の隅で軀を起したものがあつた。

・・・唯見ると、面のやうに眉、鼻、額、口の皺の、くつきりと深く刻まれた、顔の長い老爺で。鼠色の頭巾を、背屈まりに搔すくめた其の頸に折掛け、黒の紬の被布を被て、大きな藁草履を穿いたのが、こゝで心付けば先刻から其處に蹲んで居たらしい。掛聲と一緒に、二寸三寸、やつとこなたと伸びる身體が、やがて、杖の上に出た——其の杖も長くはない。纒三四尺で事足りる。曲つた腰の、胸一杯に突支 R u b y v 棒にするのであるから。

寄る年浪を漕ぐやうに、權の手練で、軽く掬つて、路を刻んで、「えい、えい。」

又言うて、来て、四人の中へ頭巾を入れた。が、浮世は見盡したらしい老の身の、目を瞑つても、顔は分ると云つた風。誰にも目をくれず、獨で顔き、獨で笑つて、

「えい、えい、ふゝゝゝ、可うこそや、恐怖がらいでの！ 美しい孫どもが、何んぢや、・・・此方がおばけぢやに因つて、夜が恐ろしくないとの。ふゝゝ、ようかし恐ろしなからうぞ。

こなた、姉孫や、兄孫どのも聞かつしやれい。老の愚痴なやうなれどの、月日の経つ、疾さは、疾さは！・・・

とぶる／＼と頭を掉つて、

「や、最う、木の葉が風に舞ふやうぢや。それ／＼と言ふ中に
も、今日は年越よ、年越の。歳神様が、こちらの清水の舞臺から、
眞葛ヶ原へ飛ばしやれるぢや、何んと譬へたか、は／＼。」「
手を其の俯向いた額に當て、杖の揺れるやうに一つ咳をした。

十七

「其のもの、歳の神様を留めうとして、芝居して見せる氣か。
其處な孫どもが舞臺へ上つて、摺れつ、纏れつ、遊びまうて來せ
たは可いがの、見さつた通り暗うなつたで、路が寂しうて歸られ
ぬとて、私が念佛堂へ頼みにぢや。處で木魚をもく／＼と敲きや
めて、こゝへ送つて來たぢやの、ふ／＼、さて又、道草食うて居
ずと、疾うござれ、えい／＼。」「
獨言のやうに言うて、杖を漕いだり。
「ほ／＼、皆知れて了うたんえ、かなはん。」「と、三千歳は袖
を合はせた。

「圓山のなかを何うおしる。祇園まで送られやはるか、えらいな。」とお桐が空の星を見ながら言ふ。

「姉はん、お桐姉はん。」

岸勇が口早に、

「産寧坂の下にな、合乗が待つとるンえ。車夫はんもお居るよつて、大事おへん。」

「そしたら、何うして連れて來んの？」

「然うやかて、車夫はん連れまうて、お参りしたら、おのぼりはんのやうやないか。」

聞くと、お桐が、清之助の外套の袖を一寸曳いて、

「氣をつけておくれやす。．．．此處にお居るのは誰や。」

と岸勇を優しく睨む。

清之助は怪顛して、

「御挨拶だね、お桐さん、然う言つちや尚悪い。」

「あ、然うや。」と片手を胸に、襟を引合はずやうにして、俯向いて莞爾する。

老爺は、背中泳ぎ、拳で腰を丁と打つて、杖を一つ石に支いた。

「え、孫たちいかつせえ、坂の下まで見て進ぜる。」

「そしたらな、あんたはん、後に逢ひまつせ。」と三千歳は、

暗まぎれにも細りとした紫小袖、襟の浅黄に水際立つて、生際も濃く色香も揺ぐ、藤の佛また目につく。．．．

其房長き花の袖から、岸勇は紅の前垂を、ほら／＼と、蝶の翼を姉に離して、ものゝ氣勢の可懐しい、はつと散る薫の裏に、清

之助を、眞中に挟むやうにして、眉を展いて下から流眄。發明な瞳の働で、ざつと見て、

「……此の間は、ちよぼつとほか逢はいで惜しうおしたえ。」と可愛く言う。

清之助は思はず、外套の袖を開いて、石持の其の圓い背を抱込むが如くにして、三千歳を見向きながら、

「いや、君たちにもなごりは惜いが、最う東京へ歸るんだよ。」

お桐は拗ねた状の背後向きで、あらぬ、坂の上の空を仰いで、

「三千歳はん、ちよつと、あんた一遍留めて見ておくれやす。」

と澄ました聲する。

「私ではあきまへんえ。」

「そしたらな……岸勇はん……」

「私かて知らんえ。」

花やかに二人で笑つた。夜櫻に燈が灯されたやうに。

「覚えておいでやす……あゝ、そないな事言やつた

ら、ほら／＼、産寧坂の鹽舐女子が、が／＼がツ。」

と柔かな握拳を、白く返して額に當つた、お桐は腰を曲げて衝と顔を。

「あツ。」

「きやつ。」

「えゝ、えゝ、轉ぶまいぞ、これ、これ、産寧坂で轉ぶと最後、三年の壽命と云ふぢや。ごほ／＼。」

と地を吹くやうに咳をして、

「其處な娘も轉業な……これ轉業と云へばの、私が留守の庵室で、また木魚を敲いて轉がすまいぞ！ 然らば、客人參つ

てござれ、立春は大吉ぢや。孫ども待ちな。」

と言ふ聲が眞暗な中へ消えた。坂の石段、舞妓の跽音、綿に金

打つ響あり。

戸の透間洩る灯の影に、濃やかな鬢のほつれ、お桐の片類は蒼白かつた。

凹ますやうに胸を擦つて、

「氣せい張つて威したンえ、おゝ、しんど。」と幽な吐息で、寂しく微笑む。

十八

「悪い串戯をする。私も驚いた。おゝ辛度もないもんだ。」

清之助はお桐の顔を瞻つたが、最う尋常京の美人であつ

た。……一人姉さん鼓が上手で、舞も巧と聞くる。おくれ毛を手に捌いて、撞木町から來やんした、と櫻を抜いたら凄からう。不用意な戯にも、自然と備はつた所作と見える。

「あなた、私やよつて吃驚しやはる、三千歳はんのおばけの方が、どない可恐か知れんのか。振袖のお稚兒やないか。兒ヶ淵の主が出て、産寧坂から圓山抜けて、祇園へ通らはるンやつたら何うおしる。」

と袖を合はせて歩行き出す。

「然うすりや戀煩ひに成る。．．．私がもしか婦だとさ。

眞個綺麗で、杜若の幻のやうだつたね。お桐さんー昔、江戸に、似た話があるんです。山の手の麻布邊から駕籠で遊山に出た娘が、上野の三枚橋。あゝ、然う言へば、其處にも清水、此の御堂

のうつしがある。．．．其の傍に、秋色櫻と云つてね、一寸お前さんが元祿鬘に結つたやうな女が、何んとか言ふ短珊を其の枝に結んだと云つて名高いよ。今度來たら案内しようね。」

「何うか。．．．祇園の鳥が、籠を抜いたら飛びまつせ。

鳥刺の棹の尖免れてな。」

「そんな間緩ツこい事を言はないで、すぐ其の風船に乗れば可い。」

「しもた！」

善哉餅の看板に、桃の下落、薄紅の、清水坂に柳の姿で、其の紫の風船を見た。

「三千歳はんは車や言うた、ことづけ頼んだら可うおした。」

「手が冷たからう、持つてあげよう。」

「大事おへん、けど面倒どすな。」

「確乎持つて居ておくれ、放すと大變だ。」

．．．自分で其の大袈裟なのが漫に可笑い。清之助は實は、嬰兒はんの土産なのを、つい忘れて、壬生の門を出しなに逢つた旅籠屋の女中が笑つた、おのぼりの此の魂が、お桐の織手に、絲で留まつた事と思つたのである。

「而したらば？」

と眞に成る。

「と其の三枚橋の袂で、すつと雲のやうに駕籠の戸を擦違ひに

通つた、悚然するほど美しい小姓があつた。……白菊の模様に染まつた紫の振袖で。これがね、江戸中を焼拂ふ通魔の所爲ださうだよ。」

「は、あの、振袖火事の話ですか。」

と聞く人が知つて居る。

「明暦の、……あゝ、御承知か。」

「悉し事知りへんけどな、貸本で讀んだのどすえ。」

「其の方が一番悉しい。私は飛々に聞いているばかりさ。何かい、本は好きな。」

「大好きです。分りはしいへんけどな。……晝間に居たら、母屋から、中庭離れた、別の二階に一人で居て、小さな机置いて、……壁にな、死なはつた姉はんの寫眞飾つて、そしてな、本ばかり讀んどのどすえ。……誰も来ては成らん言うて置く。半日の餘も、私が居るか居んか、内知らんことが不斷どすぜ。死なう思へば其處でも何時でも死ねるのどすな。」

と明日のお菜ぐらゐなものいひ。

清之助は答へかねた。

「あのな、麻布の其の娘はんが、綺麗なお小姓に逢やはつた言ふ、三枚橋は、上野から見て此の邊の處どすか。」

聞くとき清之助は悚然とした。夜が窪んで朦朧とした地の探いやうな暗がりを、ふつと湧いて、三千歳と、あの岸勇の、今も目に着く……。奇しいまで艶な姿が、衣摺の音を立てゝ、すら／＼と來さうでならぬ。

「否、」

と言消し、清之助は瞳を轉じた。

音羽山、南無、清水寺、正門の石段は、ほの／＼と浮世の暗

に區劃を作つて、廣き霞にひだある状、恰も聲なき瀧の如く、明星さがりにお桐の黒髪、未は外套の袖に流れた。

十九

「三枚橋から、黒門の石段は、まだ間がある。第一もつと賑です。誰も居ない、寂しいね。」

と思はず言ふ。

段に向つて黒い影は、實際、こゝに二人の他にはなかつたのである。其の影の後映すやうに、鎖した兩側の小店が續いて―其の處々に、沈んで陰氣な灯は、これも鴨川の水に映るかど、渡り來し松原橋を思出す、遙かに夢路のやうであつた。

「眞個な、三千歳はんたちは可恐しおしたやろ．．．．ひとり人では來られへん。」

摺寄つたのも可懐しく、肩を組むやうにして上り掛る．．．．ひと人の姿のふら／＼と且つ黒く動くのが見える、磴はどんよりと白かつた。

「あゝ、待つておくれやす。」

カタリと駒下駄の軽い音。

「何うした。」と同時に止まる。此の人の足は、恚う石を渡るにはなよやか過ぎよう。随分今日は歩行かせた。……

清之助は一段、斜めに肩で肩を支へる體で、

「さあ、最う一息、姫君お草臥れではあらうけれど……石の棧橋、それ石橋一を舞ふ勢で。」

と勵ましながら打笑ふ。……

冷き牡丹開くべし、見上ぐる空に礎消えて、雲の左右に躍れる獅子あり。「お桐の氣は衰へず。」

「あなたの方が幾度も躓きやはつて、私些とも弱りへん。けどな、思出した。……丁度此の邊どしたえ。……ひとり

でお参りに来た時にな、急にお腹が痛うなつて、立つ事もならんのだすせ。段の角へつかまつてな、師走の寒い暮方どす……

氷りついて居たればな、ーあの、お見やしたる、三千歳はんやら送つて行かはつた、念佛堂のお爺はんが出て來やはつて、私を

おぶつておくれやした。」

「おぶつた？」

「あんな爺様が、何うしてね。」

「えゝゝ、えゝゝ、聲掛けて。あなに見えはるけど達者どす。私、肩にしがみついて、切なうおすけ、目を瞑つて居

た。……産寧坂の下に、あの琴責の阿古屋はんが居やはつた言ふ茶屋があつて、今貸席どすせ。其處へ漸と行つて倒れた夜

さり、嬰兒はんが出来やはつたんえ。」

「や、腹が痛いつて産氣だつたの。」

清之助は今も覺束なさうに目を二つて、

「まあ、飛んだ事だぜ。」

と驚いて言ふ下に、言ふべからざる奇蹟をさへ感じたのであつた。

「ぢや、嬰兒はんは、観音様の告子のやうなものだ。大事にしないぢや不可いね。」と些と、しんみりする。

「嘘や！ 観音様は鳥刺やないのえ。――而して私のは爺様の、

と面はゆげに顔を背けて、

「私、願樹けしたよつてな、苦しい腹がすつとなつて、切ない胸がすつきり下つたと思ふのどす。――何んの、観音様が。――小兒授けはしやはりやへん。」

と拗ねたやうに頭を掉つた。

又清之助は言を反らして、

「あゝ、何んて名だ、嬰兒はんは。」

「みさを。」

と些と考へるやうにして答へする。

「女の操？」

「然うどすやる。」

「よく、つけたね、母さんが極道だから。」

「え。」

「感心に覺えたらう。極道さ。」

「知らん。」

と衝と襖を刎ねて、肩を撓わにすら／＼と急いで登る。・・・はじめに聞いた花やかな笑ひ聲。清之助も引續く。

立ち向つた門の柱は、鏡とも、瑪瑙の如き光を放つて、浮出づるが如く堆い。こゝにおはす仁王尊は、鎌倉の住人運慶、一代の作

と聞くからに、網戸はづれに、夜を破つて、肩のあたりすつくりと、雲にあらはに見え給ふ。

二十

二人はびつたりと門に付いて、竝んで差覗くやうにした。が、偉大なる其の拳のみ、棟を壓する氣勢して、網戸の中は暗かつた。鬼ではおはさぬ。威厳げな其の拳も、衆生を掴むとは見え給はねど、春寒の宵を裸でまします。……此の神は、樗蒲を好ませられて、ソレ一だと投げた掌、あの御力では乞目が出。……美婦を張れ、おのぼり来い！で、石の上の盆莫座に、此方が負けて、お桐を奪られうも料られぬ。兎角は急がうずるにて候。

「此のな、……お待ちやす。」

案内者は行届いて、

「此のな、一寸、角い柱に節があるンえ。同じやうに四本の柱

の向う裏にも節があつて、其處へ吻をつけてものを言ふのを、此方の節に耳を附けたら、蟻や言うても蜂や言うても、竊と響いて聞えまつせ。一遍、試して見まほか。」

と袖を舉げて柱の其の節、搔探るのが、雲を撫づる風情に見えた。――

「薄暗うて知れ憎うおすえ。」と便なげに言ふ口に、自からしんせつが籠つて居た。……何、木の節や、ものゝ音信を待たないでも、お桐の聲が、霞を傳つて彩に傳はる。

「澤山だよ。お桐さん。そして、今のも、……此の門も矢張仁王様かい。」

「此處なはな、矢大臣はんどす。」

「あゝ、羨しい。」と伸上る。

「何うしてえ？」

「嘘、可い心持の微酔でいらつしやるだらうと思つて。」

「誰や。」

「矢大臣様です。其の證據には、……何んだか唄のやうな言種だね。」

と笑ひながら、

「どちらも眞赤な顔をしておいでだらう。」

「そんな、矢大臣はんがあるものどすか。」

「東京のは皆然うさ。而して醤油樽に腰を掛けて、生味噌を嘗めて居ます。あゝ、羨しい。」

「ほゝゝゝ、えらい繼兒や、あんたはん、飲みたうすか。」

「瓶詰でもありませんまいか。」

「まあ、来てお見やす。茶屋は最うしまうたやろな。」

残惜しさうに言ひながら、背後へ手を伸べ、清之助を前へ曳くやうにして衝と急ぐ。．．．踏心は、草ともなく、地ともなく、雲井の庭は高うして、する／＼と柔かかった。

二三軒、茶店の屋根は、音羽山の影に仄めいたが、葦簀を畳み、床几も引いた、柱と柱の間の空洞が、中凹に暗いのが、靈場の端なれば、宙に書いたる卍に見える。．．．

お桐は尚覗込むやうにしたが、左の端の店前で、

「悲しいな、あんた、お酒あげましょ思つたけど、遅うまで出て居やはる、此の、とゞろき餅のお姿はんも最う歸らはつた。辛抱おしやすや。」

と優しく言ふ。

「はい。」

「私、可厭や。そないな返事しやはつて。ほゝほ、まあ、お聞きやす。此店のお姿さんはな、赤ら顔の、齒の白い、眩しらしい目皺寄らかいて、仰向いて話しやはる、拵へたやうな人だつせ。

而してな、私の姉はんが、兒ケ淵へ行かはつた時の事、よう知つてどすえ。．．．雪駄穿いて、洋傘持つて、ふつと來やはつた。兒ケ淵へは、どないして行きます問やはるよつてに、．．

．．．此の山上つて、谷へ行て、奥へ入るやて、委し事教へたら、．．．戻りに來て、茶々よばれますえ、言うて、和と笑顔して行かはつた。」

と、凝と俯向いた、瞳を上げて、

「お見やす．．．あれ、向うの、小さな御堂の傍に、高い石燈籠がありますやる、靄が捲いて上ばかり、ふうはり浮いたやうに見えるのんえ。」

と便なさうに、指しをする。

二十一

「行つても可いのかい。」
清之助は取つても付かない事を云ひつゝ、其のまゝお桐に導かれて、二三つ、星の春立つ宵の空を、こゝに清水の階の前に、切つて据ゑたやうな、龍頭を湧出て、潺々として石に溢るゝ手水鉢の處に來た。……此の手水鉢の許へ寄るのに、可いも不可もない筈である。が、實は此がお桐が、とゞるき餅の角店から指して教へた、件の石燈籠の傍にある。

……其の石燈籠の礎に、深張の洋傘を一寸肩で支へなりで、腰を掛けて、紙切へ何かしたゝめものをして居たのを。――洗髪の花月巻で、簪の珠の晃々と青く瞬く色とゝもに、茶店の婆さんは、兒ヶ淵を教へて直ぐに、見送つた目も放さないで視めて居た。

が、あれは、離々たる枯草に咲残つた、龍膽の花の蔭に、はな紙
入に挟んで残した、．．．お桐の姉が其の兒ヶ淵へ沈んだ時
のかき置であつたのだ、と婆さんが手に取る如くに話すと
言ふ。．．．

石燈籠に直ぐ近い、其の手水鉢へと導かれたので、清之助はフ
トお桐が氣を入れた話の機勢に、同じ形に腰など掛けずや、と危
ぶんだためであつた。

其處で、お桐を向うへ廻して、自分は彼を遮る體に、石燈籠を
背にして立つて、つゝ井筒振分髪を今様に、唯見ると白蓮の影が
射す．．．御堂の、廣い、打曲つた、向う遙な、廻廊に、蒼
を揃へて灯し連ねた、三つ五つ十、十五夜の朧の月に、白い珊瑚
の枠を刻んで嵌めた姿の、菱形の燈籠や、．．．其の一
つ．．．また二つ、又遠くの燈も水巴に、影を散らしてちら
りと映る。．．．龍頭の清水に差向ふ。

あゝ、嚴かに蒼く錆びたる哉。其の角よ、眼よ、口よ。深祕な
る龍の胸を透して、脈々として清淨方圓の靈池に濯ぐ。．．．
さても如月の京の冷やかにして清く且つ麗しきは、鴨川に飛ぶ千
鳥と、三千歳が手から飲む酔覺の洋杯の水と、お桐の涙の人知れ
ず氷る紅猪口と、寧ろ尚ほ其れよりも、こゝに掬んだ清水の柳の
露の御手洗と．．．やがて三條の白銀の瀬に、油も緑に、三
つの御明颯と映つて、白菊に玉散る如く、裏透いて、水晶の簾さ
ら／＼と、鳴るは、音羽の瀧とであつた。

さて、御手洗に對した時、幸にお桐の姉の話頭は轉じた。が、
其の石燈籠を背にして、苔の冷たさは、清之助の外套を透したの
であつた。

雪のやうな絹手巾を、ほつれ毛の柔順にかゝつた、美しい口に
銜へながら、お桐は向うに、姿も一段高い處で、

「よう、お濯ぎや。．．．前刻壬生のお地藏様拜む時、手
を洗ふ言やはつた。私、薩張氣が付かいでな、手水鉢の許つツと
通つた。あんたが、あない言やはるよつて、男でさへが、女子で
居て、うつかりして恥かしおしたえ。けどな、あの人混雑やはけ、
其の傍へ戻るの、えらい難儀どすよつて、．．．堪忍して
おくれやす云うて、堪へてもらうたえ。さあ、手をお出しやすー
美しい、澄んだ、綺麗な水どすやる。」

手巾を啣へた其の、皓齒を噛むまで熟と凝視めて、
「これがな、お見やす、氷の下の水やつたら、私こゝへでも入
つて死にたい。．．．勿體ないけど、流れてますせな。それ
でも一寸、濟まんけど、手だけなと入れて見よか。」

と、やゝ激した獨言のやうに言ふかと思ふと、風船の絲を片袖
に胸へ締めて、左の白い手を衝と潜らす。と淺くすらりと、練絹
のやうなのが指に搦んだ。白魚に霞が流れて、春の暮れ行く風情
して、燈籠の幻の影を、はら／＼と追ひつ追はれつ。

「あゝ、綺麗だな。」

と清之助は我にもあらず目を洗ひ、

「銀の色した金魚のやうだね。」

「嘘や！ 鮎どすせ。」

衝と火に触つて遁げたやうに、手を引込めた肩が震へた。

却説回廊を靜に渡つて――戸は最う引いてあつた――御堂の正面を、やゝ斜めに開いて、伏拜み、それから、すつと……やがて墨繪に薄彩色した、鴨川かけて、四條五條、松原の松の梢を波越すばかり、北野の社に手届くまで、京の町の半ばを彼方へ、雲から乗出したやうに思ふ。……音羽山の星の鏤ばむ、夜の霞の千疊敷、すらりと踵に迂るやうで、目に立つ板目の膨りした、此の清水の舞臺へ出て、二人で欄干に凭れた時まで、濫りに言を交はさなかつた。

で、奇とすべきは、石にも角立たず、土も滑かで、木も、迂る。……他國の道は、通るものが、我と我が足で踏まねばならぬが、京都のは然うでない。前刻渡つた松原橋も相齊しく、此の枚敷なんども、いざと立向ふと、廊下の方から掬つて乗せて、すら／＼と運ばせる。……

花もみぢ、吉野、龍田織、御手洗には、金色に搦んだ蔦の、蔓唐草の模様も見えず、……梅の枝以て衝と掲げる金襴の幕もないけれども、滴る水の響をあとに、御堂の渡殿に差懸るのが、恰も能の橋がかりに、大口高く立顯れた心地がした。

シテの其の白拍子は、靜々前へ進んだのである。
 思ひなしか、我を導くお桐の姿が、小袖の襟を、友染の色ある花の影に宿して、菱形の其の綾子張の下を行くと、ほんのりと浴る明るい烟に、羽織も帯も朦朧として、たゞ透通る膚の雪のみ、暖かな玉を伸べて、紫の風船に軽くすら／＼と浮いて渡る。

唯見て、清之助は、大悲の誓……楊柳の御手の絲に、京

の藝妓を縫らせて、東海の魚をして靈場に結縁なさしめ給ふ、と心清々しく、骨明かに肉の澄むまで、尊く可懐く感じたのであつた。

あれ見よ、燈籠の灯の連なつて、朧々とある隈は、合天井は、梁は、滴る如き翠の影。ものゝ黒きは濃かな葉、柳の枝の茂れる氣勢。

唐戸越に竊と見れば、秘密の山は夜に鎖して、三箇の燭火、三ヶ處に、九つばかりの灯あるのみ。寂として静まり返つて、漆のやうに暗かつたが、伏拝む二人の立居に、燈籠の影も動けば、欄間の隈の柳も揺れて、燈明のちらりとする時、天蓋なりや旗なりや、柱の如き錦の色、蒼く凝つて、龍の背の、薩の裳を頂く状に、煌々と輝く折、微妙の薰りニとして、其處へ名香の烟が搦むか、紫の雲が靨いた。

立つて禮すれば、跪居て拜む。．．．お桐の頸は白かつた。――此處へは景清も來、阿古屋も來、頼政も來て、鶴も來て、淀君も來たのであらう。．．．見渡す額は朧氣ながら、あの雪の衣、緋の袴、黄金の兜、白羽の箭、萌黄緘の鎧は誰ぞ。――知らず夜半には抜け出づるか。いづれ昔は、今とても、黄昏も光氏も共に詣づる御堂である。．．．去ぬる日はお桐の姉が、今しがたは三千歳が、岸勇が、其の紫、紅。

此處の額に離るゝ時、お桐は恰も、舞臺へ繪が拔出したやうであつた。燈籠の影の霞を曳いて――

「天上の臺のやうだね。」
清之助は思ひが叶つて、然も安心したやうに、且つ雲の端へ唯二人して迫出しと成つた、馴れぬ舞臺を危つかしさうな素振で言ふ。

「ものゝ譬にも聞く、高い處だとは承知をして居たんだが、慥うして、空の星を視た處は、何んだか、廣い、明い、大きな井戸の底に居て、眞晝間の暗い世界を澄まして視めるやうな氣もする。而して二人ばかりだから、尚の事、私は何故か夢を見るやうな氣がするよ。」

然矣、霞の舞臺の上に、燈籠の翼ひら／＼と、鶴のやうな蝶々の影。

二十三

「而して此處からずっと慥う見渡す、京の夜は、漆に蒔繪をしたやうに美しい。それには誰も居ず、……二人で此處へ立つた處は、妙に浮世離れをして、龍宮へでも來たやうだよ。」

清之助は欄干に支いて、高慢らしく下界を望んだ頬杖を引込まして、腕組をしつかりするまで、串戯ではなく眞顔で言つた。

又實に、其の空は、眞晝視むる工場の烟突さへ、吐出す烟が、後から／＼、東山、鴨の水に、拭はれ漉され洗はれて、直ちに薄い霞と成つて、須磨明石の浦風に千鳥を縫つて松に結んだ纜ひ船の帆柱よと視めらるゝ。殊更夜の色に包まれては、其の船が波に

沈んで、水底の宮殿の、別の一室に、新築の柱立てした風情である。

屋の棟は、八方から龜甲形の波を合はせ、濃く累り、淡く展けて、處々に濡色颯と、蒼く紅に錦を流す。電燈は、珊瑚の渡殿、瑪瑙の棧橋。四條あたりの川水に、廣告の惡火の燃ゆるさへ、琅の巖室に夕づく日の波、月の出潮、■と浅黄に、朱鷺色に、透過るか、と美しい。然ればこそ砂利を砕く水車も友染の水を巡らし、鍛冶が炎を打つ鎚も、紅を錬る仙人に齊しい都である。

鴨川は庭に敷妙の、金銀の星の砂、其の川筋を輝いて、晝の風の名残を瞬き、彼處に、王城の天高く一簇雲の白きあり、まだ暮果てぬ嵯峨の北方、碧瑠璃に澄渡つて、圓山と見る森の隈、祇園一帯、靄低く、仄に薔薇紅を彩るのであつた。

時に、瀧の音が幽に聞えた。此の水底にも春立つと、巖間を潜る秘密の音信、瞰下す左手の崖の下、千仞の谷の狐家に、燈火の影三つ、三筋の瀧を現に映して、耳を澄せば、音羽の音も、三つに分れて傳ひ來る。巖を刻んだ長梯子が、眞直に其方へ掛つて、折から事も珍らしく、影のやうに三人ばかり、もう最下の段へ、一人づつ順々に下りて行くのが、恰も泥龜が縦に泳ぐ、潛水夫の形に見えた。・・・瀧の流に風添ふよ。地に敷いたやうな柳の梢が、海松房の状に揺れて居た。

お桐がこれを片類に見替へて、

「阿彌陀堂へ下りて行かはるのえ。」

「あゝ、浦島三人、上ればいい。・・・乙姫はこゝに居る

のに。」

と乗つて出る體で段を深く．．．

「あら、龍宮や思やはる？」

そしたら、私なぞ、恚うして風船に下つた處は、それな、女子の衣着た海月どすせ。」

「すると海鼠だ。ー此の方は海鼠です。然も恚う堅く成つた處は、金海鼠だね。懷中も軽いけれど、雲の上へ乗出して居る形は、ふら／＼立泳ぎをして居るやうでならない。．．．然うでなくつてさへ、お前さんとぢや、平地を歩いても目がくらみさうなんです。高い處ぢや危つかしい。」

「そしたら可厭な心持しやはるか。」

「好過ぎるくらゐだね。お桐さんは？」

「私かて、こんな寂とした處大好どつせ、失張お酒に酔うたやうに、ふうはりと鹽梅よう浮上つて居るやうどす。何時までも何時までも恚うして居たうすえ。．．．けどな、翌朝までも．．．何んの翌朝までやる、あんたはん歸らる、汽車の時間までも、此處には居られへんのえな。」

橋の欄干でも然うどすけど、此の欄干ばつかりえ。」

と胸を引いて、向うへ、壓すが如く試みて、

「私たちが、生きるも死ぬるも、欄干一つやおへんか。此をな、ふいと外へ跨いだら、思ふやうに成るのどすせ。．．．

而して、こんな、いゝ心持やつたら、岨へは落ちいで、欄干と同じ高さの空を、ふら／＼と泳いで行かれうも知れんのえ、な

あ。

と凝と見越す．．．濡色に輝く瞳。

魅せられたと云ふのであらう。凝視められて、顔に其の瞳の透る、冷い薄絹、打蔽はれた思して、茫と成つて瞻つた、無言の清之助を促すやうに、

「一寸、倒に成つて、欄干の外へ出て見まほか。」

「一人でかい。」

と正的に見た。

「は、私一人でようすせ・・・貴下はん、飛べ言やはり

や、・・・」

「まあ、待つておくれ、怪我にも一人ぢや殺せないが、」

と串戯を言ふつもりが、引入れられて、妙に眞面目で、

「此處の舞臺から飛出すと、立旦那が土間へ落こちたやうに世間の見物が湧くだらう。第一お前さんのやうな華奢な身體は、霞の上へも柳の枝へも、すらりとかゝつて、下までも落ちまいが、・・・お附合ひをする、骨の硬い野郎と來ると、悲惨！

立處に粉微塵だ、些とまあ考へさしてくれたまへ。」

「貴下はんが、何んで私と死なはるモンや、兒ケ淵へ連れて行つておくれやしたかて、私がな、氷の下の水が欲しい云うて、身投げしたと見て居ておくれやしたら、それで可いのん、本望え。」

「だから、だから其の、」

と何故か急いで、

「薄情でも卑怯でもないけれど、其れだから、兒ケ淵へは一緒に行かれないと言ふんです。さあ、手を曳いて飛ばうと成ると、何うも、恚う言つては可笑しいけれど、うつかりつい一思ひに、此の勾欄を跨ぎさうでならないんだ。」

観音様はおいでなさる。恚うやつて仕切がついてると言ふもんだから、まだまあ此の舞臺だけに、確乎堪へては居るけれど……御覽、それだつて此の通り、欄干に掴まつて居るんだよ。」

「然うやはけな、見て居ておくれやす……私一人で飛ぶよつてに言ふのどすせ。……ほんになあ、今あんたはんが言やはつた通りや。京もな、誰も居ん處に、恚うして居たら、龍宮はんへ行つたやうにおすな。」

とあどけない、可愛い聲で、
「海鼠でも大事おへん。海の底へなと入りたうす。……而したら何時までも、こんな心持で居られますやろ。兒ヶ淵へ入らはつた姉はんは、龍宮に居て京を見て居やはるのえ。羨るおすせ。」

私なぞ、これで祇園へ歸つたら、又莫座に載つた鮎に成る。……鰯に血の出た紅さいて、おゝ、可厭らし。」

と肩をしめた。

「お桐さん。」

俯向き聞いた面を傾け、清之助は差覗いて、

「此の御堂へは、一寸々々お参詣をするのかい。」

「は、月毎にな、十七日には缺かしまへんの。道も近いよつて、暮方から一人で來ることも時々おす。」

「何んてつて拝むの？」

「え。」

と、うるんだ目で見て聞返す。

「何んてつて拝むんだね。」

「只な、手々はせてお拝みするのえ。私、何も知りへんけど、難有うおすよつてに。」

「お護符は持つて居る？」

「頂いて居りませ。」

「何處に。」

「背負上げに包んであるンえ。」

「大事におしよ、決して其れを放すんぢやないぜ。」

と幻の中に、清之助は身を正しく、

「片時も、寝る時は枕許へ。……忘れても肌身を放さず

持つておいで。え、可いかい。」

而してね、もしか又、どんな機勢に、ひよんな氣が出まいもの

でもない。其の時は、屹と一度、しつかり、其のお護符をおさへ

て、其處で分別をするんだよ。可いかい、分つたかい。」

二十五

「で、又、そんなに、兒ヶ淵が戀しかつたら、此處を其の水の

底だと思へば可い。而して今までより數を多く、度々お參詣をしたら何うだね。・・・龍宮だつて始終より、時々の方が尚居心が可いと思ふ。淵の水も、海の潮も、雨も涙も同じ水です。」

此の清水は人も知る、楊柳觀音におはします。

「二人で此處に立つて居て、頻りにものゝ身に染むやうなは、夜の冷たさもあらう、山の樹立の雫もあらう、瀧の音もあらうけれど、それよりは觀世音の楊柳の露が點滴るんです。」

雲も柳、棟も柳、舞臺も柳の梢がある。・・・大氣の中に生きてるものが、其の形の分らぬやうに、水の中に居る魚は、其の水は目に見えぬ。

同じで、お互に、樹も枝も知れないが、此處は柳の葉の中だろう。其の淺翠、濃い緑を、水だと思ひ、波だと思へば、流れる風には鬢も濡れよう、靜まる枝には袖も淀んで、燈籠の灯も揺れて映る。其のまゝの淵ぢやないか。

あの龍頭から湧くのを探せば、望みの通り、氷の下の、其の水もあるぢやないか。

何も淵川へ沈んだり、骨を碎くには當らない。お桐さん、然うぢやないか。」

我ながら説きたる哉、と清之助は打沈んだお桐の色の、花やかに晴れるのを待つ、と間もない。

懷疑の瞳は、うるみを帯びてニかれた。

「よう言うておくれやしたな。あの・・・な、然うやかて、影のやうな柳ばかりでは、私、可厭。其枝の茂つた中を、燕見たやうに、私出たり入つたりするばかりでは、辛抱できへん。」

「否、燕だと言ふから悪い。」

清之助は、思はず莞爾して、

「然う、お桐さんが住んでるなら、青柳の茂った中に、夕月が細り籠つて、薄りと鴨川の水へ映るやうなものだらうか。」

「まあ……お月様どころやおへん、私はな、燕でも蟲でも構やへんけど、一人では可厭やて言ふのどつせ。」

「だから寂しくないやうに、観音様がおいでなんだよ。」と此には清之助は猶豫はなかつた。

處をお桐が、言の切れるを待たないで、

「そしたら観音はんは、私の好きな人に成つておくれやすか。鳥刺のお爺はんやつたら、私嫌ひ！」

と拗ねたやうに頭を振つた。雪の頸におくれ掛けて。

此に支へたが、力を入れて、

「怪しからん事を、そんな！……餌刺に成つて可いものかね。随分お前さんの好いたらしい、まあ、どんなのが望みだか知れないけれど、申分のない、思ふやうな男に成つて下さるんだよ。」

若有女人設欲求男、禮拜供養、觀世音菩薩、便生福德智慧之男、
——と普門品と言ふ御經にあるとさ。だから罷間違へば、御自分

分が男になつて下さるんだ。
と賺す様にして悟して言ふ。

お桐は聞沁みる状だつたが、

「其の人やかて、何んどすやる、——矢張り此の舞臺が柳で充満や言やはるやうに、私の目には見えんのどすやる。」

「まあ、同じ事さ、然う思へば間違ひはない。」

「私、そんなら知りへん。」

と衝と向う向いて、目も遙に、夜の京の灯を見遣つた。

「……柳やなんか、影でも、幻でも大事おへんけどな、好いた人が形のないのやつたら……私居られやへんの。何の袖へ女子が縋る……誰に抱てもらふのどす、何處の枕に手が入るのえ！……」

あのな、一心のおもひが燃えて、天上から振袖の火を降らいて、江戸のありたけ焼きやはつた。——其の、強い、……私らが神様のやうな娘はんやかて、お稚児の姿を、三枚橋で見やはつたやないか。そして、まだ其の記念や云うて、振袖を縫やはつて、それを抱いてこがれ死しやはつたんどすやるな。」

ときほひ言ふ、優しい聲も、脣にきりりと締つて、臍に燃え立つ紅の艶。

二十六

「眞個に、其の娘はんは、戀に強うてけなりおす。綺麗な振袖ばかり残いて、其の、あの袖の下に消えやはつた、友染に降る淡

雪のやうに、身體は弱い女子やけどな。．．．

其の淡雪を消す、眞赤な太陽の光をすぐに取つて、思ひの火に
しやはつた。烟を立て、ひら／＼と人の姿で風に舞立つ、稚兒
の紫の振袖は、炎に成つて搦みついて、圓明寺とやらの棟の瓦の
上へ雲にかゝつて、すつくりと上らはつた時は、どんなに嬉しお
したやる。

私、本讀んでも身體中ぞく／＼する、恐怖いのやない、けなる
うて。

石段を下りて去つた、あの産寧坂曲る角で、先刻不意に三千歳
はんが、小姓の姿で來やはつた。――三枚橋の駕籠で見染めたと
同じ姿見た時はな、手を曳いてやはる岸勇はんの前垂も、燃えて
るか思つたえ。

あの姿があれなりで、三千歳はんやなかつたら、私な、――そ
れが、あの鬼でも魔でも大事おへん。．．．振袖借りて抱締
めて、兒ヶ淵へ行きまつせ。其の一念で。――迎も、其の強い、
情の深い、東京の娘はんのやうに火に成つては燃え得えでも、京
の私は水に成る。．．．

成つたら水に、水に成つたら、鳥邊野の露、嵯峨野の雨、鴨川
には流れいでも、あはれや思つてくれはる人の、袖の雫には成り
ますやる、なあ。

峠の暗夜に燃え立つばかり、小袖の裏の白羽二重にも、膚の血
潮緋桃と成つて、薄紅に透過るか、黒髪の艶の光つたのが、炎
の消ゆる雨と、もに、露を誘ふ聲も濡れて、時に燈籠の灯に水際
立つて、袖も裳も滴る色香。

美しい哉、京の水。

「果敢う涙になるのやかて、空蝉と言ひまつせな。．．．藻

脱けの袖にも縫りたいもの。．．．．．生きて居るのに、あなたは、影も形もない好いた人、．．．．．勿體ないか知りへんけど、佛はんやかて何うなります。」

清之助はしどろになりつゝ、

「凄いやうだよ、お桐さん。――驚いた、何うも其の烈しいのには。然う何も然し何です、果敢なむ事はないぢやないか。其れがね、決して影も形もないものとは限らない。願によつては、屹度其の好いた人を、佛が授けて下さるんだよ。」

「あゝ、あの、活きた。」

「然うさ。」

「ものを言やはる。」

「然うですとも。」

「一緒に連立つて歩かはる．．．．．」

「勿論。」

と答へた。

「清之助はん、――とはじめて名を言ふ、知れては居たらう、が此の時はじめて、清之助は呼ばれた我が名に愕然として、

「え。」

「あなたはんでも授かりまつか。」

「詰らん、お桐さん。――私、私などを授けるやうな、そんな

野暮な、」

と一寸途絶えた。幽に響く瀧の音．．．．．神心ともに澄む折から、謹みなし、と静に省み、

「そんな間違つた佛様があるものかね。」

「然やかて私が望んだらば、え？」

「望むなんて、」

「望むとするのえ。」

「授かるとします。」

「授かるえな。」

「あゝ、授かつたら。」

「観音様。」

と白い手で。．．．．

一足退る清之助を、胸で縋つて、欄干摺にする／＼二人の袖の
音。舞臺の影法師が、はら／＼と、燈籠を離れて動く。

「而したら、あんたはん、．．．．これからな、兒ヶ淵へ連
れて行つておくれやす。」

と外套の端を衝と取つた。

清之助は更まつて、

「そんな我儘を言ふものには、夫はお授けに成らんのだよ。」
と屹と言ふ。

「私も男だ、なぶるなら、なぶられようし、遊ぶなら遊ばれるにして、假にお前さんが授かつた好いた人だとする。」

一寸、男と云ふものは、假ひ嫌つて嫌つて嫌ひ抜いてる女でも、時の拍子で一緒に歩行いて、もし狼が出て後をつけりや、一足退つて對手を庇ふ。前から来れば楯に成る、左からなり右からなり、其の来る方を歩行くんです。いざ、飛薙りや蹴飛ばすか、逆も敵はぬなら身代りに咬まれて遣つて、其の隙に弱いものを遁すんです。其れが、嫌つて居る女でもだよ。

お前さんが嫌へるかい。

其れが、死にたいの、死なうと言ふ、生きたい、助かりたいと言ふにこそ、火水も一緒、毒も薬も飲みつのだが、一唯串戯にもしろ、手に負へんやうな我儘すると、情人ならば切れようし、夫婦なら直ぐ此の場で暇を出して了ふが、さあ、何うです！」

と笑ふつもりが、聲に出ぬ。

お桐もはつと泣かうとした、音を忍び、しばらくして、
「堪忍して、堪忍しておくれやす。．．．わけを言はんよつてな、眞個に、佛様やかて、我儘言ふと思はりますやろ。」

我儘やない、眞實え。

姉はんへ義理があつて、私死なねばならんのどす。．．．あのな、三千歳はんと、岸勇はんは姉妹や、姉妹やけど、腹は違ふのどすせ。三千歳はんの方が貰ひ子で、岸勇はんが實の兒や。．．．けどな、彼處の母はんが、眞個優し人でな、實の兒より、貰ひ子の方を大事にしやはる。其れも世間の義理やない、眞から、實から、三千歳はんを可愛がらはつてな。．．．衣服一枚でも、岸勇はんより、あの兒に買つて上げなはるんえ。

然うすると、又三千歳はんが、義理の妹を眞個に大事にしや

はるのだつせ。お客はんに、指環貰やはつても、人形貰やはつても、姉、私におくれやす、岸勇はんが言やはると、あい／＼云うて袖から離いて、指から取つて上げやはるのどすせ。優しおすやる。又な．．．岸勇はんの其の我儘なが可愛いのえ。――揚屋へ行って三千歳はんが、ぐい／＼茶碗で飲みやはる事ありますやる。誰が留めても、莞爾して居て、止しなはらん時でも、妹はんが来て、姉、毒え、言やはると、あい／＼言うて、笑靨壓へて俯向きやはります。

もしな、私が此の風船を、――とお桐の言ふのが、細い絲の縁に今も繋がつて、海月の青い景色がある。

「先刻、三千歳はんに託けごしますやる。預りものや言うて構やはりせん。姉、おくれやす云やはれば、あい／＼と、矢張り岸勇はんに上げなはるんえ。後でな、泣いて、私ににあやまりやはるまでもどすせ。私また然うやかて、あやませはしいへんけどな．．．」

其のな、岸勇はんの我儘なのが、あんた、聞かはつて憎うおすか。私、憎ない．．．實の姉や．．．違つた腹やないと思はん事には、駄々が言はるゝものやない。

聞いとくれやす．．．私もな、あの、岸勇はんと同じやつた。――顔までもな、一寸、あの子に肖てますさうな．．．

私を矢張り、三千歳はんが岸勇はんにしやはるやうに、甘やかいて可愛がつてくれやはつた、親より大事な、其の死なはつた姉はんも、同じやうに實のやおへん。――義理のある姉妹どした。――

けど、あの妓たちとはあちこちでな、私のは姉はんの方が、母はんの産の兒で、私が貰はれて行つたのだすせ。・・・母はんは三千歳はんのと同じやうに、實の子の私の姉はんの方を放つて、私ばかり可愛がらる。姉はんも一層私を可愛がつてくれやはつた。

矢張りな、姉はんの持つて居やはる、簪一つも欲しうてな、自分のもの打捨らかいても、おくれやす言うたのだすせ、あい／＼と、何んでも肯いておくれやした。」

と泣くむ。・・・聲の途切れた時、木魚が聞いた。・・・もく／＼と霏に包まれたやうでもあるし、地から湧いて出るやうでもあるし、天から降つて地にも溜らず、樹の間に掛つたやうでもあるし、とぼけた石が、話に點頭くやうにも響く。・・・

二十八

「おゝ、念佛堂のお爺はんが歸らはつた。」

と言ふ。……お桐は又、其の姉が、あい／＼と言つたのも、三千歳が岸勇に一切を肯いて、あい／＼と言ふ、其れも、一坂で逢つたあの老爺が歩行く時に、人も佛とも分らぬ音で、えい／＼、えい／＼、と拍子で言ふ、其れと同じ響きだ、と恍惚して妙な言を。

覺えてからも、やがて十年、同じやうな同じ年の一夏もすゞしの頭巾着た、齒も髯もない、大爺で、同じ念佛堂に籠つて、南無とも言はずもく／＼と木魚を敲く。一鼠木綿に黒の一重の廣袖の道服着けた、佛前に屈んだ背は、木魚を据ゑた蒲團よりも低い、造りつけの、何時も莞爾々々した尊者であるから、參詣の老若、いづれも見知越、顔馴染でないのはない。

分けて日參詣月參詣の、足は繁く、廓のものは馴れ易く、舞妓などは、竊と入つて、背を丁と遣つて一寸遁げる、こちよ／＼と撥ぐるのもある。一度などは二人で組んで、一人が背後から目隠しをした。

「えい。」
と云つて、其の形も、ポカンと撞木を留めた下から、迂らして、ポカリと木魚を突轉がして、吻々々と手を拍く。

「えい、えい、」
と言つて叱る。……其の叱るのも、讃めるのも、頷くのも、えい、えいで、杖突いて坂の上下、大儀なばかりの掛聲ではない。

其の立違つた堂の中へ、すつと入つて、澄ましてお桐が、木魚を敲く事など今でもある。

出て来て、大爺が、

「えい。」

と莞爾やかにほく／＼と頷く。．．．又木魚の音も、心びて聞くと、大爺がえい／＼と云ふ聲に齊しい。ために、遠くても、近くても、木魚の音を聞くと、もく／＼と静まつて、もく／＼と動く、其れに籠つて――ピアノ、オルガンの茫とした中に微妙の聲が、谿河の黄金の岩に白銀の水の絲の觸れるやうに――三千歳のあい／＼も、亡き姉のあい／＼も、寂しく、心細く、そゞろ悲しく可懐く、背擦らるゝやうにも、胸を抱かれるやうにも響いて聞える。．．．と言つて、ほろりとした。

「兒ヶ淵へ行つたらな、矢張り、淵の底方に、木魚の音が聞えますやる。．．．其の淵へは、姉はんが何んで行かはつた。私が遣つたのえ。あんだ。」

と切々に．．．

「姉はんにな、一人言交はした人が出来た。眞にな、生命掛けて好いてやつた。俳優はんどす。．．．帯も紐も、櫛、笄、髪のものもなくしやはるよつて、母はんが中を裂かはつた。襦袢の襟を嚙裂いて、二階にばかり泣いてどす。」

私な、竊と文箱託かつて、母はんの目を忍んで、宿へも樂屋へも使をしたのえ。．．．知れてもな、私がする使やと、母はんは叱らはらんよつて、私の座敷へ連れまうて、逢はいてあげて居たのどす。

けどな、段々辛うなつて、生きては居やはらん様子が見える。

私にかて見えるんやもの、母はんがな屹と思索しやはつた。

他に意見のしやうがないはけ、お桐はん、あんだ、姉はんから、あの人を相對づくで、もらうて了うておくれやす。．．．妹

に譲つたら、あきらめてくれるやろ、としみ／＼、私に頼みやはつた。

私えらい阿房やつたな。．．．ほんに、而したら姉はんも、あきらめがつくやら知れん。ー今、其のまゝにして置いたら、命があるにしたかつて、氣が違はずには居やはりせん。．．．思つたよつてい横Ruby戀慕した。姉はん、私に、あの人おくれやす、屹と言つた。」

と目の艶涼しく、

「漸と黙つて、私の顔見やはつて、人形や簪しのいつもの傳や。．．．あい、と一言いやはつた。」

思込んだ心ではな、自分の男や、氣も心も許した中、よそのあんたが、とれるなら奪つて見や、思やはつたも知れんけれど。．．

その俳優もな、浮氣やないか。

小楊枝嚙んで紅で書いても、乳の下切つた血と違はぬ、．．．女子の切ない状やもの。切火打つても見ようもの。樂屋かゞみは曇らぬのに、衣服合はいて、丁として、文箱の紐を解いたかつて、男の恥にはならぬものを。．．．

と美しい拳を握つて、衣柔かに膨らかな、胸を叩めて、しつかと當つ。

色なき柳さら／＼と、迴廊長き十ウ十五の燈籠、一列にすつと
 灯を潜めて、音せぬ風の添ふ状に、女の黒髪颯と濃く、舞臺は此
 の時暗かりけり。

「白粉つけたしやくんだ面で、毛むくじやらの胡坐かいて、ア
 イ來た、まだ出る、まだ出る云うて、弟子や男衆の見る前で、姉
 はんの其のふみを、チャンカチャンカと囃しまうて、文箱からず
 る／＼と長う引張つて出しゃはつたえ。．．．．

私な、姉はんのために、毒を飲む氣で、前齒で嚙んで吐出し
 た．．．．．悪い酒ほども觸りやへんの、．．．．．かびた干瓢
 の味がしたえ。」

と手巾を口に當てたが、吐くとよりは身を絞つて、血を灌ぐか
 と切なげに、肩を絞るのがあはれに見えた。

「でもな、姉はんは死なはつた。對手がかびた干瓢やかて、私
 が然うしたに違ひはない。――濟む、濟まんは別にしても、懐か
 して、戀してな、早う傍へ行にたうおす。．．．．．」

よし、其れでないとても、私は容易く覺悟が出来る。一息に唯
 目を瞑りさへすれば、其のまゝ氷の下へ行かれさうな事も毎々で。

幼い時、つい鄰家から火の燃えた事がある。私を負ぶつて、裏
 木戸の水門で、川原に釣するのを見て居た子守が、狼狽へた餘り
 烟の舞込む縁側へ驅込んで、何を周章てたらう、押入の中へ入れ
 た。而して閉めた。．．．．．幸に自分の家は焼けなかつたが、
 半壊して、床の間の壁を鳶口で突落す音を聞きながら、入れられ
 たなり、出もしないで、震へてばかり居たと言ふ。

近い年、圓山の也阿彌樓とか、白晝火を失した事がある。・
・折から紳縞の客に呼ばれて、丁度一さし山姥を舞つて居た。
ソレ火事だ、と言ふと、蜂の巢のやうに湧き立つて、羽を眞赤に、
客も藝妓もわつと遁げた。が、如何に急でも、藝の最中、然まで
には取亂されず、さす手を控へて、捲袖の扇子をかざして、峰を
視れば、欄間を覗く煙の端、黒雲颯と吹下ろす。小褌もあげず、
裳を曳き、舞扇を小脇に切めて、疊廊下を落つる身が、遁後れて
唯一人。矢を射るやうな炎に追はれて、式臺際まで走つて出ると、
水も人も渦巻く中、通りかゝりの兵士一員、火を見て救はうと驅
込んだ出合頭、躍上る足の機勢に、此の膝頭を「Ruby」と蹴
つた。あつと脛もなえ、帯を亂し、崩れたやうに腰を落とすと、其
の場合にも驚いて、兵士は立窺みに成つて熟と見る。火よりも其
の顔の恐ろしさに、あれ、と廊下へ駈戻つて、烟の下を座敷へ披
け、廣縁から庭へ遁げたが、炎は忽ち廂を嘗めて、濁朱の瀧津瀬、
松に浴び、葉尖から火花が散る。・・・：火氣に惱んで、藤
の花が見る見る色變る棚の下に、べつたりと諸膝組んで、舞扇を
折つて敷きつゝ、覺悟の口に袂を啣へて、薔薇の薫る手巾に、息
も吐き、且つ氣も遠くなりながら、つい、別に、あせつて悲しく
もなかつた處を、講中で来て居た東京火消が、ほりものした裸體
の肩へ、引擔いで出たと言ふ。
火は、當日、別室に、婚禮の披露目があつて、未だ媒的人も來
ない先、櫻炭が蒲團に勿ねて、花輪櫻の梢を揺つた、折からの風
に煽られて燃えはじめた、と後で聞く。・・・

今日の話の序に思へば、思はぬ男に添はねばならぬ、仔細あつ
て、嫁に成るべき振袖が、焼滅ぼした火かも知れぬ。・・・

「焚かれて死ねば可うおしたな。けど、藤の房では、じつとして、掴まって死ぬにたよりが無いのえ。同じ色の振袖やつたら、助けよう、言やはつても、火の中を出るのやなかつた。記念のお召縮緬や、裾模様をな、二階の部屋の衣桁に掛けて、夜さりなどな、姉はんにも言うて、一人で泣いて居る處は、その昔の江戸の、其のな、娘はんにも變らぬけれど、弱いえ、逆も火に成つて、振袖に燃え立つて、天へ上る力はおへん。思ふがないゆゑどす、戀しい人を知らぬゆゑ。

氷の下の水がなうては、炎の上の烟にもなれぬ。何やかて、私なぞ、露玉はおろかな事、小糠雨にも成れ得んやろ。

そしたら、東京の女子衆にも恥かしいやないか。私口惜いもの、あなた、途中でも頼んだ通り、兒ヶ淵へ連れて行つて、せめて、一雫、袖の涙に、私を水にして欲しい！ 京の人やつたら頼みやへん。」

と又絶つた袖を引かして、清之助はすつくと立つて、息も吐かず、お桐を凝視めた。

瀧の響も途絶えるやうに、もく／＼もく／＼たる聲。あい／＼と幽かに、綺麗に、衝と閃いて、中に交つて、其の音羽山の奥なる淵の水底から、山を買き、地を潜つて、大爺が蹲まる、頭巾よりむくと堆い、大なる蒲團の上、木魚の下に籠るかど、凄く美しく聞えるのである。

「お桐さん。」

と清之助は力ある聲を沈めた。

「・・・・・・・・」

目と目の熟と合つた時、

「行かうよ。」

「え。」

「兒ケ淵へ。」

「あ、行かはるか。」

と・・・・・珍らしいまで、些と燥いだ、飛立つやうな身動きで、

「もう、こんなもんな、放かつて、」とかなぐるやうに手を放す・・・・・其の護謨風船の影は見えずに、山の巒が、ばら／＼と、漆黒な木の葉を映じて、音羽の梢を倒に、つゝと絲を曳いて眞蒼な星が流れた・・・・・兒ケ淵へ落ちたであらう。

と晃然と飛んだ筋を辿つて、其處へ山越す路筋の、落葉、枯葉の散り喰む、松の下、谷、藤蔓、桂、薄の刈株、木の根も白けた骨の中に、底澄んだ淵の藍の如きが、幽に風も添つて、草ながらおどろ／＼と動いて見ゆる心地がして、其處とも分かず、濕つた薫が楓と來た。

お桐の裾は、居ながら、其の亂敷く、常磐木の枯葉の上を乗るやうに見えた。

途端に、手早く外套を脱いで投げたが、下へも捲落つべき勢が、重量で留つて、舞臺の欄干に翻然と成る。清之助は、瘡ぎすな中脊の、羽織の袖をぐいと緊めつゝ、お桐の手を確乎と取つて、

「顔を御覽。」

と言ふ・・・・・調子が變つた。

「顔を御覽、私の、私の顔を。」

と屹と見据ゑて、

袖を、袂を、帯を。．．．二階の居間に掛けて置く、記念の其の小紋にも、裙模様にも見えるだらうーそれ、襦袢も紅い花がこぼれる。菖蒲、おもだか、岸の白菊、水の中を今出たやうな、振袖を着て居るよ。可哀相にお前、お桐さん。可愛い人を、淵へ沈めて 可いものかね。

私が殺しはしないから。」

肩を胸へ抱き込んで、

「さあ、よく顔を見せておくれ、可懐かつた、可懐かつた。清之助ぢやないよ、お桐さん、顔を御覽、私の顔を、顔を。」

と云ふ、色の白い、鼻筋通り、眉鮮かに浮出るやう、舞臺の空に星を透かした、影なき楊柳の緑を籠めて、．．．あゝ、観音の御功德、額に鬢にはら／＼としたゝるばかり、肩に餘つて、丈なす黒髪。

「あ、、姉はん。」

と恍惚した、お桐はぶる／＼と戦いて絶つた。

「あい、」と清之助は優しく答へた。

其の時學んだ不思議な聲は、もく／＼、もく／＼として、暗にふつくりと湧く其の木魚の底に沈んで聞えた、と思ふ聲音であつた。

で、此の時ほど、心のまゝ、思ひのたけ、骨髓を徹して婦人に扮し得た事はない、ーと清之助は人に語る。．．．斯の人、姓を葦山とて、若手當時の立女形が、祇園の芝居に約束出来て、はじめての京のぼりに、其れとなく、土地の人氣を見に、一度先んじて潛かに旅した、．．．これは其折の事であつた。

慙がくて、やゝお桐きりの心こころが宥なだめ得えた時とき、清せい之の助すけは、自じ分ぶんの生い命のちも助たすかつたやうに思おもふ。淵ふちへ行ゆく女をんなの力ちからは、斷たれぬ絆きずなであつたと言いふ。尚なほ清せい之の助すけが、悚そつとするまで、且かつ凄すこく、且かつ美うつくしく、清きよく感かんじたのは、一いっさて更あらためて手てを取とつた時とき、淵ふちの水みづをつらぬき留とめた露つゆのやうに、力ちからなきお桐きりの腕うでを迂すべり手て尖さきにはづれて、冷つめたく光ひかりつた、一いっ聯れん水すい晶しやうの珠じゆず數ずで。

書ひるま間まから、思おもふやうに肩かたの上うへへも手てを上げあげなんだは、京みやうの女をんなの、包つましく優しとやか婉かなためばかりでなく、腕かひなに祕ひして其その珠じゆず數ずが。

【完】